

青ノ山6号墳調査報告

1977

丸亀市教育委員会
香川県教育委員会

例 言

1. 本書は香川県丸亀市と綾歌郡宇多津町にまたがる青ノ山南麓に所在する青ノ山6号墳の調査報告書である。
2. 位置 香川県丸亀市飯野町東分551-1
3. 本調査は丸亀市教育委員会と香川県教育委員会共催で実施したものである。
4. 調査は昭和51年4月13日から4月27日までのうち13日間実施した。
5. 調査の実際は香川県教育委員会文化行政課調査係長松本豊胤の指導のもと、同職員松本敏三、同嘱託唐木裕志が主として担当し、大砂古直生、横田佳代子が補助し、丸亀市教育委員会社会教育課長新井君夫、同副主幹高木徹夫、同主事西山勝の協力によって実施した。また地元の金沢芳弘氏他多くの協力を得たことを付記しておきたい。
6. 各遺構の実測、遺物の実測、写真撮影、トレースは、松本敏三、大砂古直生、唐木裕志、横田佳代子が分担して実施した。
7. 本文の執筆、編集は主に松本敏三が担当し、横田佳代子、唐木裕志が補助した。
8. 本墳は調査後、丸亀市教育委員会が香川県教育委員会文化行政課松本豊胤の指導のもとに完全な修理復元を施した。

目 次

1 章 調査の契機とその経過	1
1 調査の端緒と経過	1
2 調査日誌抄	2
2 章 位置と環境	3
1 青ノ山 6 号墳の立地	3
2 周辺の環境	3
3 青ノ山古墳群の概要	6
3 章 墳 丘	8
4 章 埋葬主体	8
5 章 遺物出土状況	10
1 出土遺物一覧	10
2 遺物出土状況	11
6 章 出土遺物の観察	12
1 装身具類	12
2 武具類	13
3 馬具類	14
4 不明鉄器	14
5 土器類	15
a 須恵器類	15
b 土師器類	16
7 章 まとめ	22

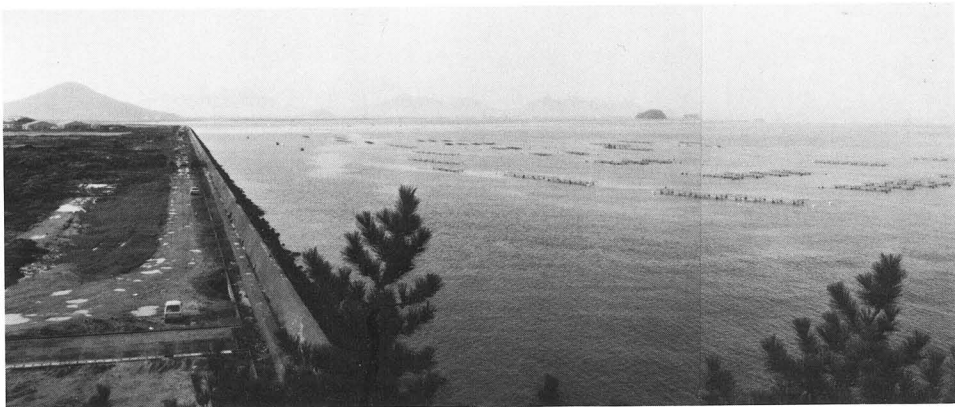
1 章 調査の契機とその経過

一 調査の端緒と経過

近年広まりつつある都市化現象は丸亀市郊外の青ノ山周辺にも及び、住宅団地、墓地公園など大がかりな開発が最近数年の間に行なわれ、さらに今後これ等の開発事業は社会的要求とともに敷衍してゆくものと思われ、埋蔵文化財の所在が容易に予測される地域もこれら公共、民間にかかる開発のため崩壊されるやも知れない。このような状況にあつて、埋蔵文化財の所在の確認、個々の遺跡の広まり、性格を開発に先立って熟知しておく必要があるため丸亀市教育委員会は昭和49年度事業においてこの青ノ山周辺地域の埋蔵文化財分布調査を実施したところ別記一覧の示すような後期古墳群を確認した。青ノ山6号墳は、こうしたものの内にあつて、緩い丘陵状尾根の稜線部分に、1m前後の2・3石の花崗岩が露呈している状態で、古墳であるのか、ただ単に自然石が露出しているにすぎないのか、いずれとも言いがたい現状であつた。そこで丸亀市教育委員会は文化財愛好の有志に呼びかけて試掘調査を実施した。50年3月桃花の開く時期であつた。石群は天井部を失なつた横穴式石室であることが判明し、西壁部分から羨道部分にかけての壁面が大きく傾斜して崩壊寸前であるため、直ちに調査を実施し、記録を作成することが必須であると判断した。

そこで、香川県教育委員会と連絡を取り、昭和51年度事業として4月12日から調査に着手すべく準備に取りかかり、香川県教育委員会と丸亀市教育委員会共催で、4月14日から調査を開始した。

調査終了後、幸いこの地が丸亀市有地であるため、修理復元を施し、広く一般に公開し、教育の一環とするとともに文化財愛護の呼びかけを行なうことにした。丸亀市は修理復元作業の計画を香川県教育委員会と連絡し、その指導のもとに昭和51年11月25日から復元工事に取りかかり、12月25日に終了した。



第1図 丸亀平野と青ノ山

二 調査日誌抄

昭和51年4月13日 現場で市教委関係者の説明を聞く。石室を清掃。トレンチ（N・S）発掘にかかる。

14日 雨の為、作業中止。

15日 石室入口の松の木伐採。石室内部の清掃。

16日 床面の清掃。玄室内遺物分布図作成。Sトレンチ石室掘り方検出。

17日 羨道の遺物出土状態の実測。Nトレンチを掘開したが攪乱のため墳丘裾部はつかめず、墳丘外部施設は認められなかった。

現地説明会（丸亀歴史クラブ他）。青ノ山周辺の分布調査実施。

19日 石室の割りつけを終る。石室壁面の実測。E・Wトレンチの発掘。N・Sトレンチの断面を実測する。

20日 Eトレンチの断面を実測する。雑木、下草等伐採。墳丘測量。E-W断面図作成。

21日 雨の為、遺物の洗浄。

22日 壁面の断面を実測する。E・Sトレンチを埋め戻す。床面の清掃。

23日 N-S断面図、Wトレンチ断面図作成。床面清掃。

24日 平面図以外の実測図全部終了。写真撮影。付近の遺跡分布調査。

25日 羨道部床面と前庭部を精査したが排水溝は検出されなかった。

26日 各部の平面図を点検し、補填する。トレンチを埋め戻す。

27日 丸亀市教育委員会と整理、報告書作成、遺物の保管等爾後の打ち合せをする。

11月25日に修理復元工事にかかり、12月25日に完成する。

2章 位置と環境

一 青ノ山6号墳の立地

丸亀市と宇多津町にまたがる標高 224.5 m の青ノ山南麓は中腹の傾斜変換部分から宇多津町東分と丸亀市西分・上分に向かう二条の尾根に分岐する。さらにそれらの主脈は高度を減ずるに従って各々ヒトデ状に支脈を派生し、丘陵状の複雑な地形を呈する。青ノ山6号墳はこの西に伸びた主脈が分岐して長く南に突出する顕著な丘陵状尾根に立地する。尾根先端はさらに二分され、竜塚と吉岡神社古墳の立地する丘陵丘阜に至る。竜塚と青ノ山6号墳の間には、墳丘状の地形を呈する微高地が尾根稜線上に等間隔に2ヶ所認められるが、主体部の有無が確認されず、現時点では墳墓であるか否かは不明である。

二 周辺の環境

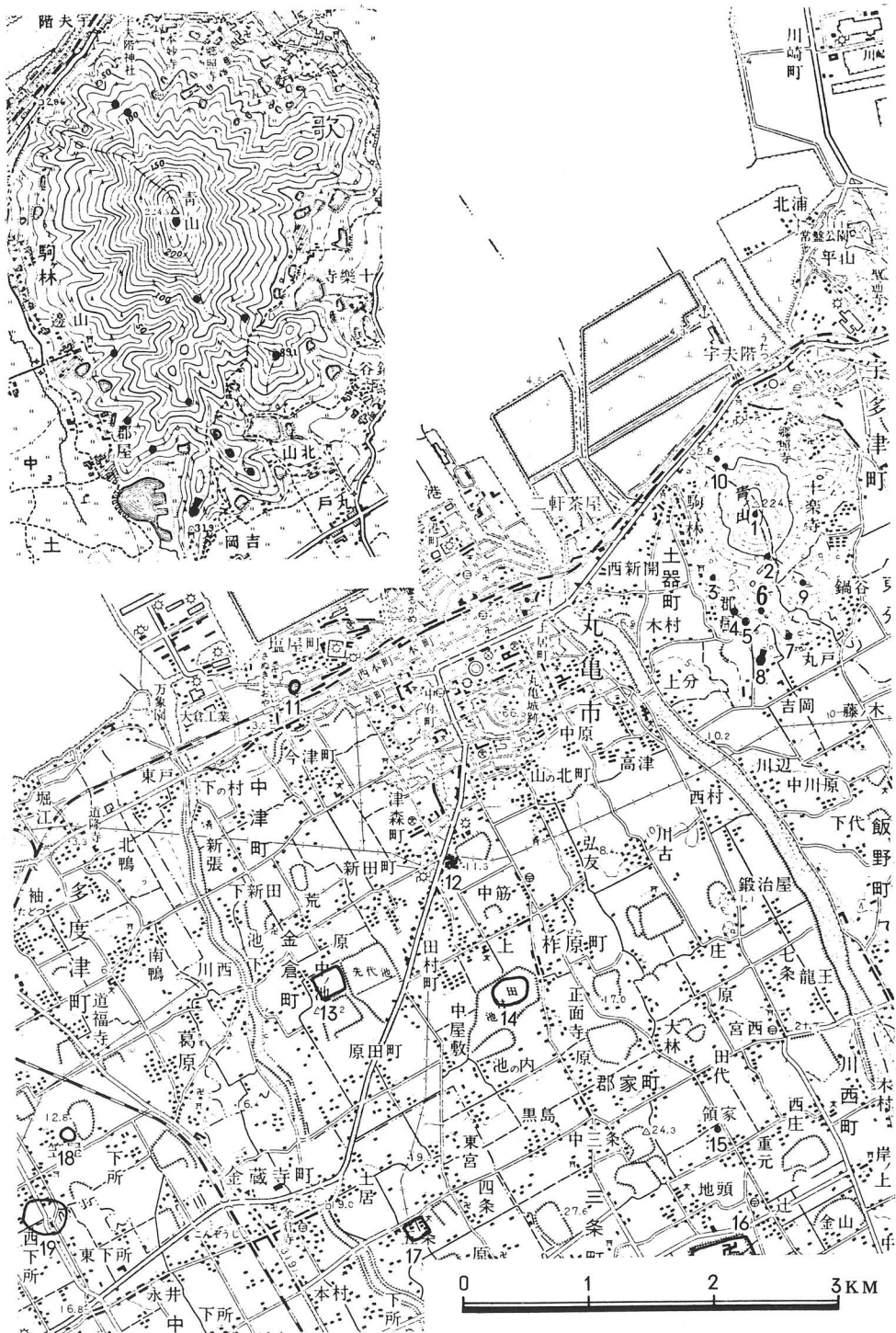
阿讃の境界を為す琴南町の山間部に水源を發し、上流・中流域でさらに水量を得た土器川は、満濃町吉野あたりから、満濃池に源を發する金倉川とともに、肥沃な丸亀平野を形成する。国土地理院の地形図「まるがめ」（5000分の1）を開けば、整然とした条里とともにその柵目の中に点々と溜池が目にとまる。一見なだらかな地形を示すかに見える丸亀平野も、金倉川、土器川の氾濫の跡を各所に残して、微高地状の高まりや曲折する旧河道が随所に見い出せる。この条里は先学によって縦に3分されている。東部は宇多津町、坂出市境から土器川左岸までで阿野郡の条里で8条を数える。中央は那珂郡の条里で、先の土器川左岸から金倉川左岸までで、西部は金倉川から善通寺市吉原町にまたがるものである。いずれも整然とN30°Wの方位を示す。

丸亀平野とその周辺部の文化は旧石器時代、縄文時代の遺跡は未確認で、弥生時代とともに始まる。多度津町三井遺跡、丸亀市中ノ池遺跡、善通寺市五条遺跡等は前期に入る。中期はこうした初期の遺跡群が、四方に広まり、山裾部分や平野部に分散し、その数も増加する。また善通寺市旧練兵場では箱式石棺・土器棺といった墓制とともに多量の土器が出土し、後期のものが主体だと伝えられる。前期には概して海岸線近くに所在した遺跡が中期には各所に広まり、顕著な弥生遺跡の多い香川県にあっても特に先進的な地域を形成していたと考えられる。

善通寺市大麻山北裾や同市我拝師山の北麓、南裾と与北町の如意山を中心とする独立丘陵には、銅鐸をはじめ銅剣・銅矛といった青銅器が出土していて、これら丸亀平野の弥生文化の豊富さを物語っている。

古墳時代の遺跡は墳墓が主体となるが、善通寺市大麻山眼下の西部地区や、多度津町海岸寺背後の山麓や、丸亀市青ノ山南裾に大小の前方後円墳が群在し、夫々注目すべき性格を示し、丸亀平野に形成された古代勢力の結集の様子がうかがえる。古墳時代後期の古墳もやはり先述の各地に逆る古墳と重合して分布し、横穴式石室を内部主体とする群集墳の盛行が各所に認められる。

歴史時代に入ると善通寺市善通寺跡を始め中村廃寺跡・田村廃寺跡・宝幢寺廃寺跡など奈良時



第2図 青ノ山古墳群および周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡

	名 称	備 考
1	青ノ山 1号墳	
2	" 2号墳	
3	" 3号墳	
4	" 4号墳	別 項 参 照
5	" 5号墳	
6	" 6号墳	
7	" 7号墳	
8	吉岡神社古墳	前方後円墳全長50 筒形銅器、銅鍔、銅鏡出土丸亀平野を一望に収めることができる位置に立地。
9	青ノ山墓地公園東古墳	丘陵微高地に立地し、墳形は不明、内部主体は箱式石棺で石棺内面に朱彩が認められる。
10	宝塚古墳	宇多津町寄りの山麓に位置し、内部主体は横穴式石室である。
11	古銭出土地	五銖銭から至大通宝にいたる4905枚の古銭を納めた壺が出土。
12	田村廃寺跡	奈良時代の瓦出土、礎石1個残存。
13	中ノ池遺跡	弥生前期土器包蔵地 昭和51年度重要遺跡調査で溝状遺構と小ピット群を検出。
14	田村遺跡	弥生時代から古墳時代にかけての土器包蔵地。
15	郡家庁跡	奈良から平安時代の瓦が出土、郡司庁跡と考えられるが四至不明。
16	宝幢寺跡	奈良時代の瓦出土、礎石が水底に埋没している。他に土壇跡2個残存。
17	五条遺跡	金倉川東岸の微地形に所在する。弥生後期から中期の土器包蔵地。
18	笠屋遺跡	三井遺跡の北東300mの所に新たに発見された遺跡で弥生中期から後期の包蔵地。
19	三井遺跡	弥生前期の遺物包蔵地で遠賀川系土器、磨製石包丁等出土。

代の創建にかかる古代寺院跡が確認されている。平安時代から中世を含めると十数ヶ所の寺院跡があげられる。寺院跡と深い関連を持つ瓦窯跡も善通寺市に2ヶ所所在する。また古代官衙に関連する郡衙も、丸亀市郡家・丸亀市土器町に郡屋の地名があり、周辺に古代寺院跡の所在することからほぼ同所に比定し得る。南海道の駅制の甕井駅は善通寺市永井か、多度津町三井。中世に於いては、雨霧城址・甲山城址・青ノ山城址や中村城址・榊梨城址等の城址関連の遺跡が丸亀平野を取り囲むように所在するとともに、宇多津や多度津などの海に関連する町並も中世に栄えた。一方、海上では塩飽水軍が活躍した。なお丸亀市塩屋町からは、五銖銭から至大通宝にいたる4905枚の古銭を埋納した壺も出土している。

三 青ノ山古墳群の概要

青ノ山6号墳の所在する青ノ山は旧鷓多郡に所在する瀬戸内海に臨んだ秀麗な独立山塊である。しかし青ノ山西麓下の丸亀市市街地から土器町にかけては丸亀城築城（慶長7）以来の比較的新しい平地で、旧状は土器川下流の低湿地であったことを考えれば、青ノ山古墳群は平地を背後にひかえ、海に臨んだ特徴的な古墳群であると思われる。標高224.5mの青ノ山の山麓周辺は丸亀市の主たる古墳群地域であり、土器村史・丸亀市史などの郷土誌にも10基以上の古墳が記されている。今回の発掘調査に関連し周辺遺跡を確認したところ次のようであった。前期に入るものは筒形銅器1・銅鏃5等の出土した前方後円墳として著名な吉岡神社古墳とその南西裾に所在する箱式石棺と丸亀市墓地公園東端の標高87.5mの高所に新たに発見された墓地公園東古墳（組み合せ式箱式石棺を内部主体とし、地山整形による墳丘を持つ）の3基を除いて他はすべて群集墳の盛行する後期古墳である。以下列記するとおりであるが、その大半は平野側ではなくむしろ低地を見降す南西側の山麓もしくは山裾部の丘陵に立地する。

青ノ山1号墳（青ノ山山頂古墳）

標高224.5mの青ノ山頂上付近は南北に台状を呈しているが、その南寄りに位置する横穴式石室を内部主体とする円墳である。石室は全長6m・玄室長2.5m・巾1.5m・高さ1.5m以上の両袖式である。石材はすべて大型の安山岩を使用している。開口方向はほぼ南である。墳丘の盛土の大半は失なわれ、規模は不明であるが、径15m前後・高さ2～3m程のものと思われる。

青ノ山2号墳（青ノ山中腹古墳）

青ノ山山頂から南下する急傾斜面が緩く変換する地点に位置する。墳丘の形状は定かでないが、等高線に平行するように主体部の主軸を定めている。埋葬主体部は両端に大形の小口石を立て短側壁とし、長側壁は下段にそれぞれ数石を置き、その上部にさらに2～3石を積む堅穴式石室である。床面は角礫および割石を用いた敷石が認められ、須恵器壺・土師器片を出土した。長さ2.85m・巾0.5～0.7m・高さ0.65mを測る。

青ノ山3号墳（田潮神社周辺に3基所在したと伝えられるもののうち現存する1基）

墳丘の封土の大半は流失しているが、石室周囲の版築部分はよく残る。径15m前後の横

穴式石室を埋葬主体とする円墳である。主軸方向はN45°E前後である。開口方向は不明である。石室の石材は比較的大型のものが用いられている。

青ノ山4号墳（郡屋石鎚神社西古墳）

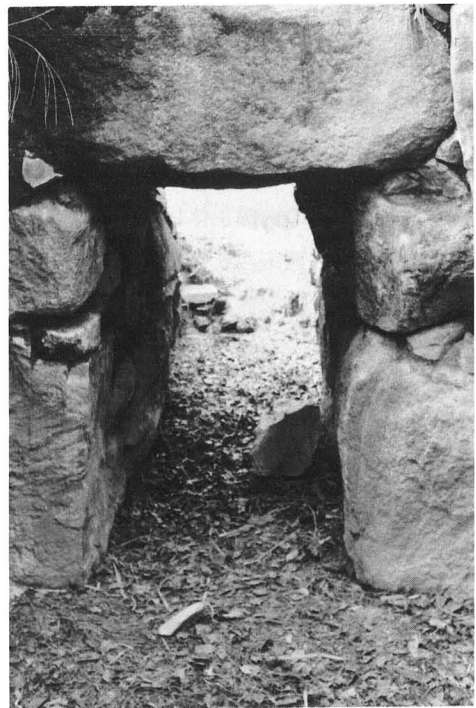
青ノ山南西裾の丘阜に所在する石鎚神社の西に位置する。尾根と直交するように主軸を定め南に開口する片袖式の横穴式石室を内部主体とする円墳である。径12m・高さ2m前後を測る。

青ノ山5号墳（土器村史に掛樋山古墳とあるものか）

青ノ山南裾に広がる丘陵状尾根のうち西に伸びるもので、4号墳と6号墳とに挟まれた尾根の南傾斜面に立地する両袖式の横穴式石室である。玄室前半部の天井石が取り去られ石室内部を露呈している。全長約7.5m・玄室長3.5m・巾1.6~1.7m・高さ1.7m以上・羨道長4m・巾1.0~1.2mで羨門に近づくとつれ巾は広まる。残存する天井石は扁平な大型安山岩を用いていて、取り去られた石材とともに2石で天井部を形成していたと考えられる。

青ノ山7号墳（竜塚と通称される）

青ノ山南裾部の尾根先端からやや奥地の微高地に立地する。南西に開口する両袖式の横穴式石室を内部主体とする径25m前後の群中最大の規模を持つ円墳である。石室全長9.5m・玄室の長さ3.8~3.9m・巾2.4m・高さ2.5m、奥壁に花崗岩の巨大な鏡石を用いる。羨道は5.7mを測る長大なもので、玄門部巾は1.3mを測るが、羨門に近づくとつれて徐々に広まっている。



第3図 青ノ山7号墳（竜塚）の羨門部

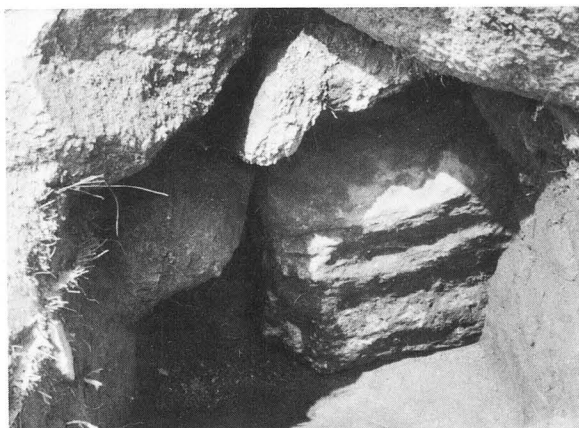
3 章 墳 丘

青ノ山6号墳は青ノ山西南麓の尾根稜線上に築造されたものであるが、墳丘盛土の大半が流出しているため、石室構築の石材が露出していなければ自然地形の微地形と見過ごされるような現状で、墳丘の詳細を知ることは困難である。地形図から見れば、墳丘中央部の石室周辺は3/10ほどの勾配を示す傾斜面を為し、尾根上方部では8mほどの平坦に近い地形を示しその先で自然地形にもどる。また尾根下方側は石室から10m前後の地点から傾斜は極めて緩くなり自然地形となる。東西の尾根傾斜面は羨道部前面にやや緩い傾斜面が少し認められるが、他は自然地形と大きな変化は認められない。墳丘断面からみれば、盛土は殆んど残らず、地山直上の花崗岩風化バイラン土（赤褐色）、旧地表の黒褐色土、その上部に黄褐色または赤褐色を呈する花崗土が認められるだけで、その上層は現在の地表である。しかし、石室背面と墓壇掘り方の空隙には数層を数える花崗土と黒褐色土の重層が認められるところからみれば、墳丘盛土も版築によったものと考えられないこともない。

墳丘の表面観察から墳丘のみかけ上の規模を推定するのは困難であるが、トレンチの断面の地山変化から復元すると、南北長10.5m・東西長11mが得られる。墳丘高は現状で約2.2mであるが、南北墳丘基底部の比高差が2.3mを測ること、現存する側壁最上段に大型の山石を架構したと予測されること等からすれば、3m前後の墳丘高が復元される。

4 章 埋 葬 主 体

青ノ山6号墳の内部主体は、尾根稜線に直交して西南西に開口する全長3.2mの片袖式横穴式石室である。巾1.3m～1.4m・長さ2.2mの長方形プランの玄室に羨道を直交させたL字型の平面プランを呈する特異な形態である。



第4図 石室背面観と掘り方

各部の位置

全 長	玄室長	玄室巾	玄室高	羨道長	羨道中	羨道高	主軸方位	開口方向
3.2~3.4 ^m	2.15~2.2 ^m	1.3~1.4 ^m	1.5 以上 ^m	2.4 ^m	0.7~0.85 ^m	1.3 以上 ^m	N57 °E	西南西

石室は尾根稜線を断面L字形に穿った墓壙に玄室を定位し、玄室主軸に直交するよりやや斜交するように羨道をT型に繋いでいる。墓壙掘り方は旧地表面から深いところで約1m、浅いところで約0.3m掘り下げ、床面を平坦に整えたものである。掘り方を全掘していないので詳細は不明であるが、玄室平面形に近いものと思われる。また、自然地形に見合った高低差を示す玄室掘り方の上面プランからみて、西南の谷に向う羨道部の掘り方は軽易なもので、むしろ玄室掘り方に繋げるかたち掘られていると推測される。なお、墓壙掘り方と玄室周壁との間隙は花崗岩風化パイラン土と同質のものに粘質土を混合したものを互層に重ねた版築によって充填されていて、石材による揃え積みは全く認められない。

石室周壁の構築は石材の大半を花崗岩に求める。石材の形状は不揃いで、大型山石とやや小型の山石を加工したものを乱石積みしたものである。主石材の間隙は割石をもって充填している。奥壁は僅かに持ち送られているが、他は垂直に積み上げられ持ち送りは現状では認められない。さらに一段もしくは二段の石積みがあったと考えられるが、持ち送りがどの程度であったかは不明である。東壁は羨門からみると正面にあたる壁面である。安定した腰石を3石配して上段の積石を行なう。三段目でレベルを整えて、四段目には大型の力石を置き天井部を構築したものと推定される。現存する壁面で約1.5mを測る。西壁は袖部を為す壁面であるが崩れが大きく石組みは多少ズレている。奥壁巾と等しく1.3mを測る。基底部に根石を2石配し上段を積むが、構築の状況は他壁よりも粗雑である。南壁は玄室壁面と羨道側壁をも兼ねる山裾側の壁面で全長3.2mを測る。横長の山石を多く用いた構築である。玄室部で四段、羨道部分で二段の石積みを残すが、横圧により外方へ傾斜している。

玄室の床面は地山を水平に整えた墓壙底面に、まずやや小型の角礫を敷き、ついで10cm前後の扁平な割石を敷き床面とするが、多少の凹凸を水平化するようにさらに小角礫を充填する部分も見あたる。角礫は大半が安山岩であるが、花崗岩のものも若干認める。床面の勾配は北壁部と南壁部で、僅かに数cmを測るだけである。また玄室中央部の断面からみると床面は水平に近いが、中央部がやや低い。羨道部正面の玄室床面は羨道部に向けて若干の下傾が認められる。



第5図 玄室部北壁

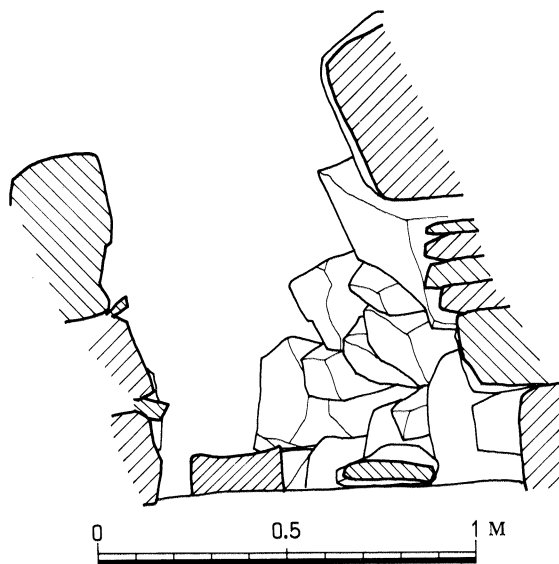
羨道と玄室は20~30cm大の安山岩割石2石でその床面を画する。袖部は玄室の壁面をそのまま使用していて袖石は認めない。

羨道部側壁は山側で袖部を形成する。それに対して、南側(山裾側)は玄室と一連の壁面で先述のように袖石等の玄室との境界を持たない。羨道部の床面は玄室寄りの奥半と羨門寄りの前半

部分とでは様子が異なる。玄室寄りには床面に扁平な安山岩片を敷くもので、全面に入念に敷きつめたものではなく各所に空白を残す粗雑な構造を示す。羨門寄りの前半部分は敷石を全く認めない。羨道中央部には玄門部分に認められると同性格の仕切石状の石組みが、羨道を二分するように横断する。玄室部分の仕切が地山に埋め込まれ固定されているのに対して、これは床面に置く軽易なもので、仕切石とも羨道閉塞の石組みともとれるが、遺物の出土状況から判断すると羨道部への追葬が行なわれた際の棺台施設とも考えることもできるが攪乱のため定かでない。

羨門部は樹根のため大破しているので詳細な構造を知ることはできない。羨道前半端部の側壁は南北両壁とも石材が小型化していて、その部分の根石は地山に深く埋め込むことをせず、むしろ地山を掘り残して羨門部分の壁面を構築している。また羨門部分の床面は地山をそのまま利用したもので、羨門よりやや奥に入ったところで、10～30cm大の安山岩・花崗岩の割石を用いた閉塞施設が為されている。現存する閉塞施設の高さは僅かに十数cmであるが、二段以上の石積みが行なわれていたと伝えられる。

本墳の羨門は丘陵状尾根傾斜面に開口する。羨門部分の床面は羨道閉塞の石積みの前面で傾斜を変換して墓道部分に移るが、地表面の浸蝕が大きいので、墓道・前庭部の構造を知ることはできない。しかし、本墳の立地する尾根は馬背状の非常に狭いものであることから、羨門前面は自然地形の傾斜を利用した墓前構造を考えることができる。



第6図 羨門部より羨道部見とおし実測図

5章 遺物出土状況

一 出土遺物一覧

装身具類	管玉 6	平玉 1	ガラス製丸玉 1	ガラス製小玉 30		
武具類	太刀 1	鉄鏃 12以上				
馬具類	鏡板 2	銜 2	引手 2	鉄製辻金具 1	鉄製鎖 1 連	鉄製鉸具 1
不明鉄器	鉄斧の破片か					
土器類	須恵器	坏蓋 8	坏身 5	壺 3 (広口壺 2, 長頸壺 1)	大型壺 或いは	
		甕片 1 群 (1 個体分の底部のみ)		有蓋短頸壺 2	提瓶 3	
	土師器	壺 或いは甕 1				

二 遺物出土状況（図版1）

青ノ山6号墳の主体部は特異な平面プランの片袖式横穴式石室であるが、既に発掘前に天井石が失われ、各壁の上部の石材もかなり抜き去られていたため、石室内は流土で埋り、傾斜地に側壁上部の一部分が露呈しているような状態であった。床面上約30cmのところでは土質は大きく変化する。上部は柔らかく腐蝕した黒褐色土で遺物は1片も含まれなかったが、下部からは一変して非常に堅くしまった暗灰褐色土となり須恵器の出土をみるようになり、以下床面までの20cmの間に上記の遺物が群在していた。このような出土状況は遺物を目的とした盗掘によるものではなくて、石材を目的とした開墾によってこの古墳が破壊されたことを示していると考えられる。したがって、遺物の出土状況は原位置に近いとみなしてよいと思われるが、石室が破壊される以前に攪乱の事実が皆無であったとはいえない。副葬品の出土状態は玄室中央部から北壁より須恵器・土師器・鉄刀・鉄鏃・馬具・装身具類が群を為したかたちで認められたが、他には南壁下と羨道部に散在した状態で、須恵器・馬具が検出された。

中央部及び北半部の遺物出土状況はほぼ原位置をとどめるものと考えられる。須恵器は3群に分れて分布するが、西側壁よりその過半が分布している。西北隅には鉄鏃（10本）と馬具（轡・留金具）が玄室主軸に斜行するかたちで塊状に出土したが、外容器・外装具（布・板）の痕跡は認められない。鉄器群の東側近に須恵器短頸壺（21, 22）・短頸壺蓋（23）・坏身（20, 17）・坏蓋（18）が一群に出土したが、坏身（17）と坏蓋（18）は重ね合った状態で出土し、坏（18）の上部に管玉（8）・短頸壺（22）直下に管玉（9）が検出された。玄室中央西壁よりには土師器壺・須恵器坏・坏身・提瓶・広口壺・鉄鏃片がまとまった状態で出土した。そのうち坏（11, 13）は床面より約20cmのレベルで出土し、坏（13）と提瓶（28）は重なった状態であった。玄室東北隅には鉄刀一口が主軸に斜行するかたちで出土しただけで他の遺物の分布は認められない。玄室中央部東壁下には坏身（26）と坏蓋（25）が重なった状態で出土し、やや離れて坏蓋（24）が検出された。玄室のほぼ中央部には、管玉・平玉・ガラス製丸玉・ガラス製小玉からなる玉類が60cm程の長円形の範囲に散在した状態で検出されたが、他の装身具は認められない。玄室の南半、つまり羨道正面にあたる部分でもあるが、この部分では壺もしくは甕の胴部とみられる須恵器片と提瓶（27）がいつでも床面に密接した出土状態で検出された。

羨道部南壁は既に根石部分を残すだけで、側壁上部・天井部は大破されていて、羨道床面上部に石室材の花崗岩が散乱していたが、床面上部10cm前後から非常に堅くしまった灰褐色土が検出され、その土層中に須恵器提瓶（51）・長頸壺（52）が検出された。さらに床面に付着したかたちで馬具（54）が検出された。これ等の遺物の分布状況は、羨道床面を横断する3列の仕切柵施設とみられる配石と関連したかたちであった。玄門部の仕切石の北側羨道側壁より提瓶（51）がもたせかけられた状態で出土し、さらにその下位に馬具（55）が出土した。羨道中央部に定められた仕切石状配石上には長頸壺（52）が検出され、南壁との隅に馬具（54）が仕切石と羨道南壁に挟まれた状態で検出された。また、羨道部羨門付近は松の根によって著しく攪乱されていて、短頸壺（53）が花崗岩列石の石塊群中から出土した。先述したように奥部の仕切石以外は、或いは棺台とも考えられないこともない。

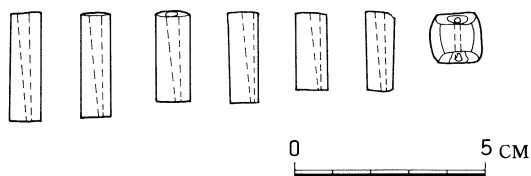
今回の調査は既に開口していて、天井石も全く残さない石室の清掃、検出を第一にしたものであるため、墳丘部分や墳丘裾部周辺の調査は僅かに十字トレンチによるものだけであった。発掘調査地域の範囲内では、遺物の出土をみることはなかった。また、羨道前面部分の調査を約8㎡ほどのトレンチで精査したが、墓道の施設は既に流失してしまい不明であった。この墓道部分・前庭部分も発掘調査の範囲をみるかぎりでは、遺物の出土は認められない。

6章 出土遺物の観察

一 装身具類(図版7)

青ノ山6号墳の装身具類は玄室中央部の床面、もしくは、床面直上の粘質埋土中に検出された。ガラス玉は玄室中央部に塊状にまとまって出土したが、平玉・管玉はその前後に玄室の長軸に沿ってほぼ直線的に分布していた。

管玉 6個検出された。一連のものと考えられるが形状は不揃いである。大きいものは径8.9mm・長28.8mm、小さいものは径7.45mm・長21.05mmを測る。孔は全て一方から穿たれていて、他方は非常に細いものもある。色調は灰味緑のものを除いて全て暗いオリーブ色を呈する。また、石質も灰味緑のものを除いて他は全て良質の碧玉製品である。



第7図 石室出土玉類実測図

平玉 1個発見されただけである。長さ12.65mm・巾13.50mm・厚さ6.35mmを測る丸味を持った扁平な碧玉製品である。孔は上下両端を斜めに切り、両方向から穿っている。表裏両面とも平滑に磨かれているが、一方が片方よりも狭い平滑面となっている。

ガラス製小玉 総数30個を数える。最大のものでも径4.55mm・厚2.65mmを測るにすぎない小玉で、円柱状の側面を持ち、端面が直線的にカットされているものと、丸玉状のものがある。色は透明な青色系統が最も多く、15個。次いで、緑色系統が9個。黄色系統が6個を数える。緑色系統のものは透明なもの和不透明なものがあるが、黄色系統には透明なものは認められない。

第2表 管玉および平玉計測値

単位 mm

番号	出土番号	径	長	上孔径	下孔径	色調
管玉1	8	8.90	28.80	3.25	1.20	暗いオリーブ色
2	6	8.55	27.65	2.90	0.90	〃
3	9	7.75	24.35	2.90	0.70	〃
4	3-1	8.15	23.90	2.75	1.30	〃
5	3-2	8.10	20.80	2.70	0.85	〃
6	5	7.45	21.05	2.65	1.25	灰味青緑色調
平玉7	1	長 幅 厚	12.65 13.50 6.35	上孔径	下孔径	暗いオリーブ色
				2.90	2.90	

ガラス製丸玉 1個体分の細片化された破片が検出されたが、法量・形状は共に不明である。色は先述の小玉の紫味青と等しい。径5mm~10mmの大きさが推測される。

第3表 ガラス製小玉計測値

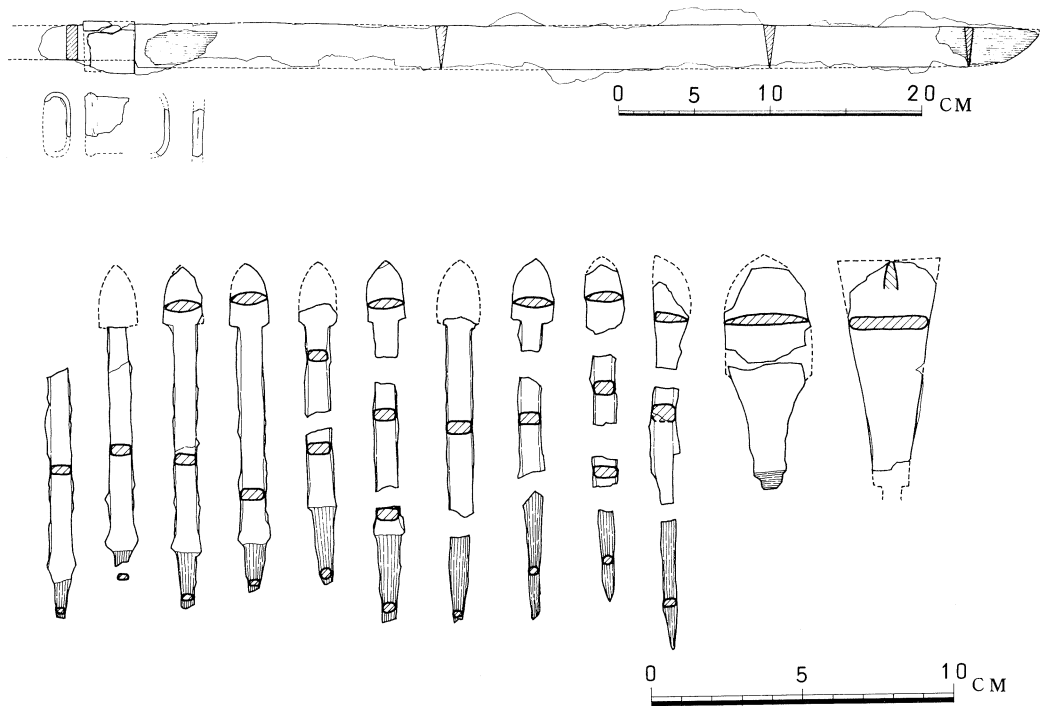
単位 mm

番号	径	厚	色調	透明度	番号	径	厚	色調	透明度
1	3.55	2.45	うす黄	不透明	16	3.45	2.45	うす緑味青	透明
2	3.65	2.15	"	"	17	3.60	2.15	緑味青	"
3	3.50	2.35	"	"	18	3.55	2.05	にぶ青	"
4	3.50	2.15	"	"	19	3.30	1.75	"	"
5	3.90	2.60	"	"	20	2.75	1.80	"	"
6	2.85	1.30	黄緑	"	21	3.20	1.90	"	"
7	2.75	1.55	にぶ緑	"	22	3.30	2.10	"	"
8	3.05	1.70	"	"	23	2.65	1.70	"	"
9	3.35	1.80	"	"	24	3.35	2.30	"	"
10	3.50	2.60	"	"	25	2.35	1.25	"	"
11	4.10	2.55	灰味緑	透明	26	3.80	2.10	"	"
12	4.20	3.20	灰味青緑	"	27	4.55	2.65	緑味青	"
13	3.35	2.85	"	"	28	4.05	3.10	"	"
14	3.25	1.60	"	"	29	3.85	3.25	紫味青	"
15	2.40	3.10	にぶ青緑	"	30	3.40	1.85	"	"

二 武器類(図版8)

太刀 玄室北東隅に検出され錆化が激しく基部は半失しているが、貴金具・鞘口金具・縁金具が伴っていて、全体として保存が良い。刃部は62.5cm・巾2.8cmを測る断面クサビ状を呈する平造りである。切先の部分と鞘口付近には木質が残存する。基部は現長で4cmを測り断面はほぼ方形であるが、基部で半失しているため目釘孔は残らない。刃部と基部の境に長さ3.4cmを測るほぼ方形の鞘口金具が残っている。やや離れて検出された貴金具は断面二等辺三角形状を呈する。鞘縁は貴金具と同様の断面を示す先端部に帯金巻きを付したものであるが、半存状態で長さは不明である。鞘口金具・縁金具・貴金具は鉄地に銀渡金したものである。

鉄鎌 玄室北西隅で塊状に重ねられたかたちで発見された尖根式のものと同様の袖部近くの玄室に検出された平根式のものである。前者は10本分の鎌身部分を数える。鎌身の形状は両丸三角形状のものと刀子状のものに分れる。篋被部は厚さ4~5mm・巾7mmの隅丸角柱状で、基部との境でその巾を広める。基部には木質が残存するが、樹皮・巻糸の痕跡は失なわれている。平根式のものには斧箭式と柳葉式各1点ずつであるが、鎌身部のみで先部は失なわれている。斧箭式のものには鋒先巾3cm・長7cm以上を測り断面はやや厚いが扁平である。柳葉式の鎌身部分は基部まで7cmを測り扁平な両丸形の断面を示し、関を持って基部に移る。基部は断面楕円形を呈し、表面に木質が残る。

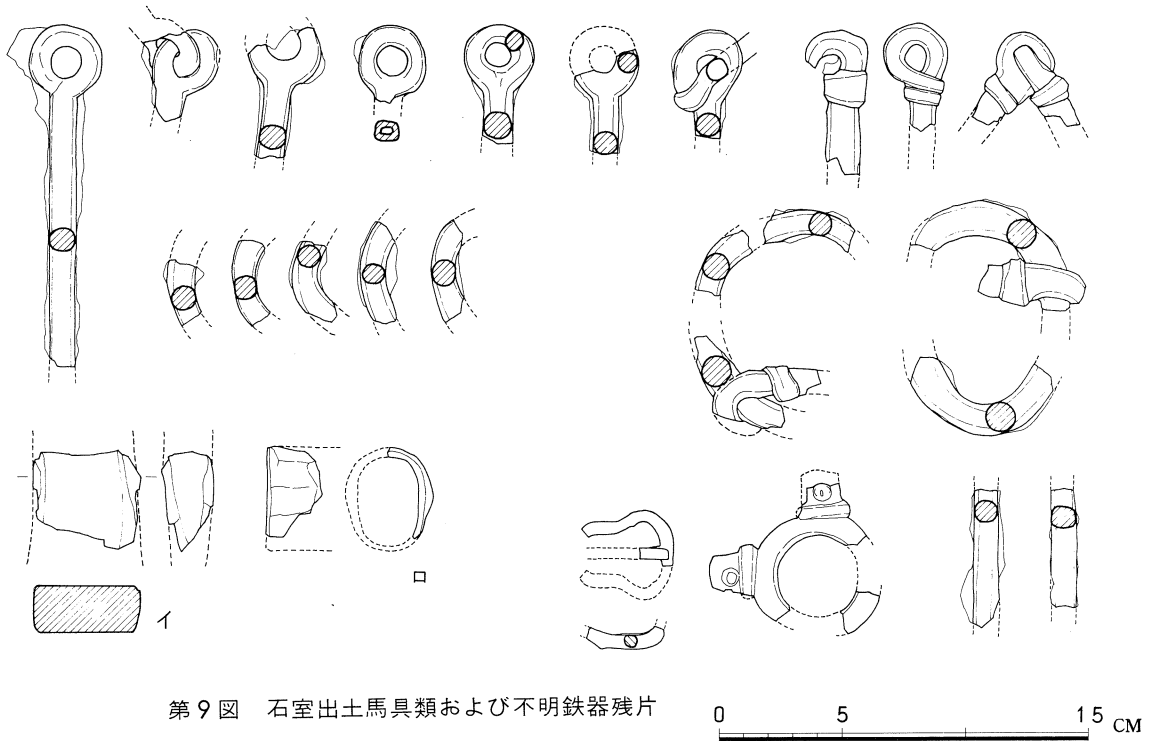


第8図 石室出土武器類実測図

三 馬具類（図版7，9）

玄室西北隅に鉄鏃群に接して検出されたものと、羨道部発見の一群とがある。玄室部発見の一群は鏡板・銜・引手・辻金具・鉸具の組み合わせである。銜は中央で遊環連結された2連式である。鏡板は楕円形を示す環状であるが立間は付かない。引手は左右一対復原される。銜・鏡板・引手はともに棒鉄を使用したもので、銜・引手の環部はともに棒鉄の先端を叩き丸めたもので、その末尾を棒状部分に巻きつける。辻金具は扁平半球状の上半部を切った形体の体部に、十字型の脚部を付けたものである。脚と体部の接する部分には責金具が巻かれている。脚端部の造りはにぶい山形を示す。脚部に打ち込まれた鉸は脚部底面より6mm下方に突出している。鉸具は1個体の一部分が残存するが、細い棒鉄を瓢形に曲げたものであり、現長4cmを測る。基部の形状は定かでない。

羨道部に検出された馬具は、鏡板・銜・引手と兵庫鎖であるが、前三者は一群に出土し、後者は離れた地点に検出された。銜は遊環連結した二連式である。鏡板は4片に細片化されて旧状は定かでないが、やはり、楕円形と考えられる。立間は見い出せない。引手は棒鉄を使用し、その端部は環状でやや角度を持って曲折している。兵庫鎖は3連結のもので、やはり、棒鉄を用いている。



第9図 石室出土馬具類および不明鉄器残片

0 5 15 CM

四 不明鉄器残片（第9図 図版8）

イは鉄斧の中央部と考えられる。巾4.3cm・厚さ1.9cmを測り隅丸方形の断面を呈する。下部になるにつれて厚さを減じる。ロは図上に復原してみれば、扁平な倒卵型の断面を示し、長径4.2cm・短径3.2cmを測り、太刀の一部分と考えられる鍛造品である。

五 土器類（図版10~13）

a 須恵器 出土須恵器は一覧表に図示した通りである。

坏蓋 8個体はほぼ完形の状態で出土した。器型は大型と小型に2分され、さらにその内で大型のものは2分され、小型のものは4分される。1・2は口縁部と天井部の間にかすかながら段を持ち、天井部が平坦なものである。いずれも天井部内頂部に叩目痕を残す。3・4の外形は整美的な円形を呈する。天井部と口縁部の境目は2条の凹線によって画される。いずれも口縁端部は丸味を持ち内に段を有する。天井部にやはり叩目痕を残す。5・6はやや小型でともに焼成すこぶる堅緻であるが、各部の特徴は異なる。5は天井部が平坦に近く広い。口縁部との境に凹線を持つ。口縁部は丸く内彎し端部は軽く外反する。口縁内面に稜を持ち、内頂部に叩目を残し大形の1・2と相似する点が多い。6は天井部のヘラ削り範囲も狭く丸味を持ち、口縁部は直立に近い。口縁端部は丸く仕上げられている。7は暗い青灰色を呈する。各部の調整は全体として粗く、天井部はヘラ切りされただけである。口縁部は短かく直立し、端部は丸く仕上げられている。8は天井部が粗いヘラ切りで、器厚は非常に厚い。口縁部は外反し端部は丸味を持つ。或いは坏身と

も考えられる。

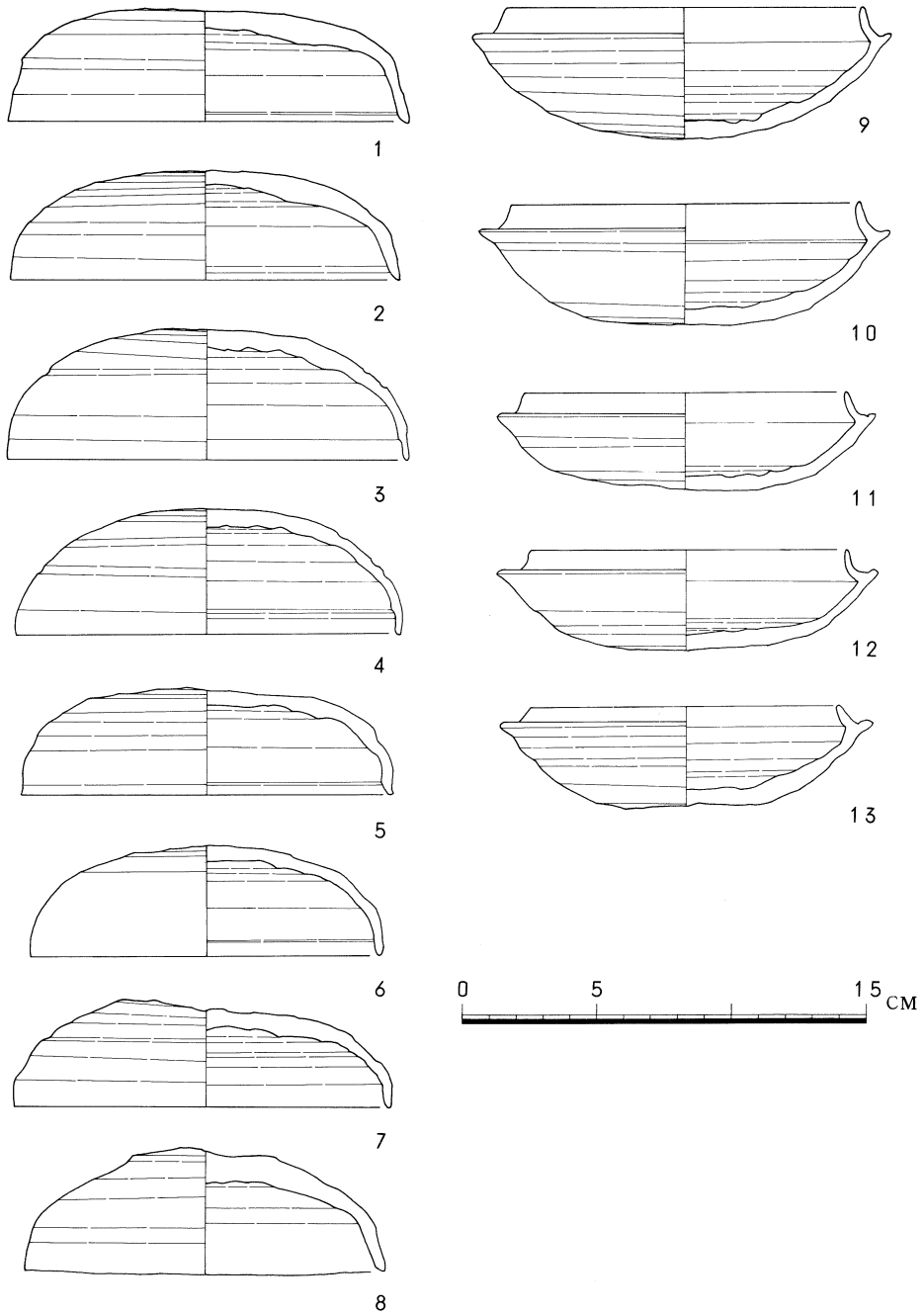
坏身 5個体ほぼ完形で出土した。細部の特徴で3分される。9・10は最大径15.5cm以上を測り、坏蓋の大型のもの3・4とセットを為す。立ち上りは1.5cmを測り内傾して、ゆるく外反する。受部はいつでも外上方へ上向いている。いつでも内底面に叩目を残す。11・12はほぼ同形で、焼成も堅緻である。立ち上りは1.2~1.3cmを測り内傾するがゆるく外彎する。12は坏蓋6とセット関係にある。13は坏蓋7とセットを成し、手法も細部まで一致する。立ち上りは短く厚く、内傾する。受部は凸レンズ状に肥厚する。

甕片或いは大型壺 玄室東南部の隅に検出された破片であるが、旧状は復原されない。内面には同心円叩目が施され、外面は平行叩文が交錯する底部の破片と考えられる。焼成は不良で黒ずんだ灰白色を呈する。

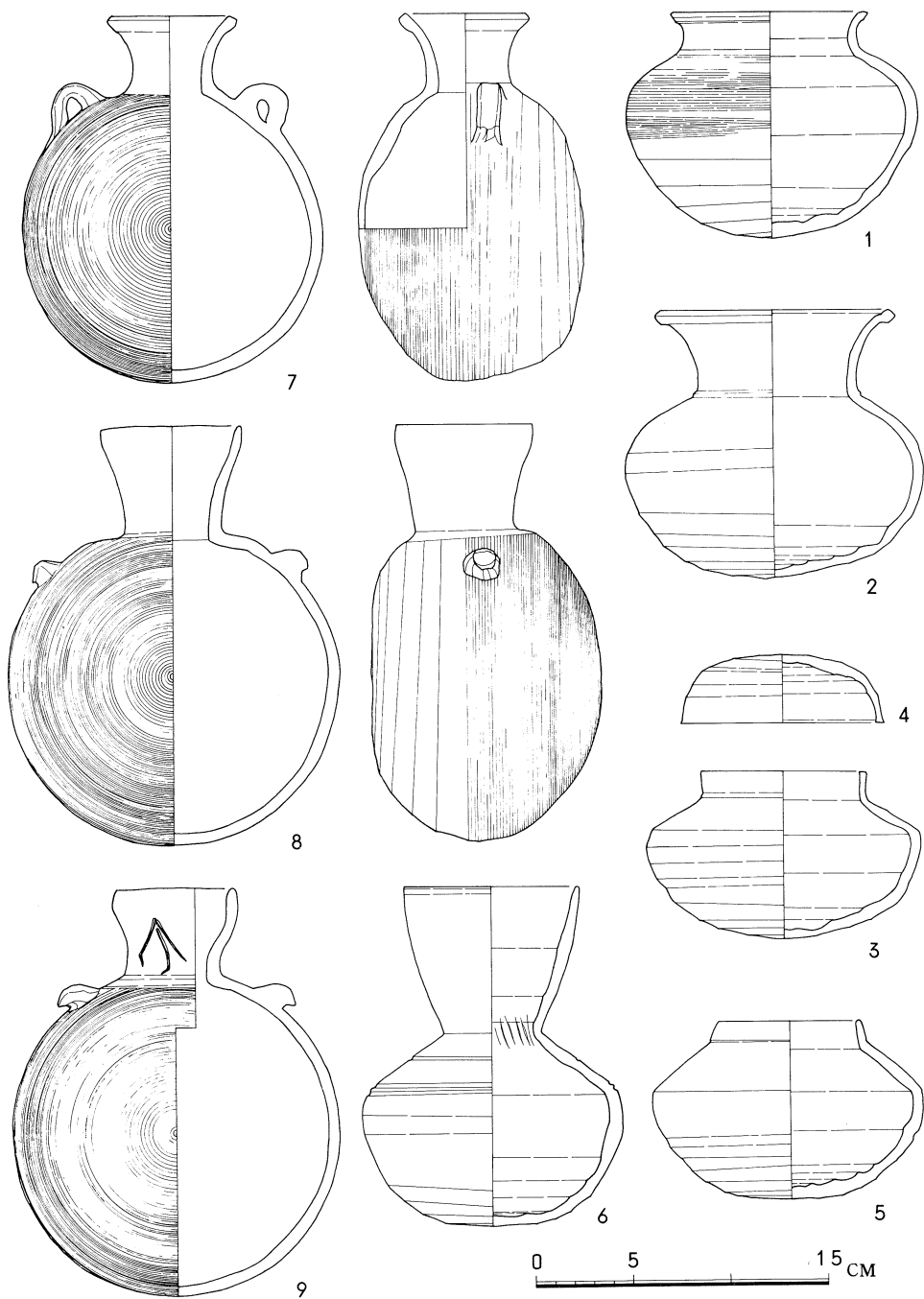
壺 いずれも小型壺で、口頸部の短かいもの、広く外反する大きなものと長頸壺、各々1個体と、有蓋短頸壺2個体が検出された。1は胴径14.9cm・口縁部径10.2cm・高さ11.7cmを測り、口頸部は短い。頸部は短く外彎し口縁部に移る。口縁端部はわずかに突出する。肩部・胴部・底部の境は不明瞭で、全体として球形状を呈する。調整は丁寧であるが、灰白色を呈し、焼成は不良である。器体内壁に赤色顔料が付着していた。2は頸部付け根に低い凸線の稜を持ちゆるく長く外反して口縁部に至る。口縁部の断面は丸味のある菱形を呈し、外へ強く張り出す。体部は扁平な楕円形状で、肩・胴・底部の境は不明瞭である。底部は広くヘラ削りされている。長頸壺50は羨道部に検出された。口径部は頸部つけ根からほぼ直線的に上向する。器厚は頸部つけ根が薄く、中央部で肥厚し、端部で再び薄くされる。丸味を持つ端部で、外面上端近くに浅い凹線を有する。体部は肩部・胴部・底部の境が明瞭である。肩部は頸部との接合部から直線的に斜行していて、肩部中央に一条、胴部との境に二条の凹線が巡る。

有蓋短頸壺 2個体分あるが蓋を持つのは1個体だけである。4は蓋5とセットになる。胴部最大径14cm・器高8.6cmを測る。口縁部高は1.5cmを測り直立し、口縁上端は平坦にナデられている。短頸壺蓋5は4と同様暗い青灰色を呈し、全体としてシャープな感を持つ。天井部はゆるい円形でヘラ削りを認める。口縁部高は1.5cmを測るが、天井部との境に段を持たない。口径10.4cm・器高3.6cmを測る。6は羨道部羨門近くに検出された。口縁部は短く、内傾し、端部は丸味を持つ。体部は肩の線が下がり、肩部と胴部の境からはほぼ円形に底部に到る。肩部には焼成時に灰が融着し、黄褐色を呈するが、他は黄味がかった灰白色で焼成は堅緻である。

提瓶 玄室で2個体、羨道で1個体 検出された。7は坏蓋2の下に検出された。環状の耳を持つ。口頸部は頸部接合部から外反していて、口縁端部は断面は丸味を持つ三角形を呈する。8は玄室南部に他の土器と離れて検出された。耳は短く鉤状に曲折して直ちに先端部となる。口頸部の接合部からゆるく外反して上端部近くで再度僅かに内彎し口縁部を為す。接合部は強く横ナデしているため体部との間に稜を持つ。体部前面はゆるい孤状に張り出し、背面は平坦である。9は羨道部に馬具と重なって検出された。退化した鉤状の耳を持つ。口頸部は接合部から一担直立してから外反し中央部からさらに内彎して口縁部は直立している。頸部に笹状文様のヘラ記号が明瞭に刻まれていて注目される。



第10図 石室出土須恵器類実測図



第11図 石室出土須恵器類実側図

第4表 須恵器の観察

番号	土器No	土器名	形態上の特徴	手法上の特徴	その他
1	18	坏蓋	<ul style="list-style-type: none"> 天井部は、なだらかに丸味を持つが天頂部は平坦である。 天井部と口縁部との境界に浅い不明瞭な稜線を残す。 口縁部は、僅かに外方に開き、口端部は丸味を持つ。 口縁端部の内面に沈線を、かすかに認む。 	<ul style="list-style-type: none"> 天井部のヘラ削りは、$\frac{4}{5}$程である。 天井内頂部には、叩目を残す。 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土は精良で1~2mm大の砂粒を含む。 焼成堅緻。 色調は青灰色である。 坏身17と重なって出土。
2	13	坏蓋	<ul style="list-style-type: none"> 天井部は、なだらかな丸味を持つ。 天井部と口縁部の境に、かすかな稜を残す。 口縁部は、外方へ広く開き、その端部は丸味を持つ。 	<ul style="list-style-type: none"> 天井部のヘラ削りは、$\frac{4}{5}$程である。 天井内頂部には、叩目を残す。 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土は精良で1~2mm大の砂粒を含む。 焼成堅緻。 色調は青灰色を呈す。
3	16	坏蓋	<ul style="list-style-type: none"> 天井部は、ゆるやかな丸味を持つ。 天井部と口縁部の境は稜を残さず不明瞭となる。 天井部の傾斜面には、1~2条の凹線がめぐる。 口縁部は、薄く仕上げられ、その先端部は、丸味を持つ。 口縁端部の内側は、9mm程えぐられたように薄く仕上げられ、稜を為す。 	<ul style="list-style-type: none"> 天井部のヘラ削りは、約$\frac{3}{4}$に及ぶ。 天井部内頂部には、叩目の上に仕上げナデを認す。 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土は精良である。 焼成不良。 色調は全面灰白色 17とセットをなす。
4	24	坏蓋	<ul style="list-style-type: none"> 天井部は、ゆるいカーブを呈するが、傾斜部の傾きは、やや急である。 傾斜面に2条の凹線を認む。 口縁部の仕上げは16と同様である。 	<ul style="list-style-type: none"> 天井部のヘラ削りは、$\frac{2}{3}$程である。 天井部内頂部には、叩目の上に仕上げナデを認む。 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土は精良で、細砂を含む。 焼成不良。 色調は、全面灰白色を呈する。 20とセットを為す。
5	15	坏蓋	<ul style="list-style-type: none"> 天井部は、平坦で口縁部との境界に向かって傾斜する。 口縁部と天井部との間は、浅い凹線によって面される。 口縁部は、内彎気味であるが、口縁端部近くは直立である。 口縁端部は、横なでにより平坦である。端部の内側は、明瞭な稜線をなす。 	<ul style="list-style-type: none"> 天井部のヘラ削りは、$\frac{4}{5}$程である。 天井部の内頂部に叩目を残す。 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土は、精良であるが1~3mm大の砂粒を含む。 焼成、非常に堅緻。 内外面とも明るい青灰色を呈す。
6	25	坏蓋	<ul style="list-style-type: none"> 天井部は、丸味を持つが、ヘラ削りが荒く、段状を示す。 天井部から口縁部にかけての曲線は、角ばっている。 口縁部は、余り外に開かない。 口縁端部は、丸味を持ち、その内側に、かすかな沈線がめぐる。 	<ul style="list-style-type: none"> 天井部ヘラ削りは、$\frac{2}{3}$程である。 天井部内頂部に仕上げナデを認む。 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土は精良であるが、1~3mmの砂粒を含む。 焼成非常に堅緻。 色調は青灰色であり、内外面とも自然釉を前面に認む。
7	11	坏蓋	<ul style="list-style-type: none"> 天井部は水平で、やや凹み気味である。 天井部と口縁部の境は、不明瞭である。 口縁部は短くて、直立するが端部は、丸味を持つ。 	<ul style="list-style-type: none"> 天井部ヘラ削りは、$\frac{1}{2}$程である。 天井内頂部には、仕上げナデを認む。 内面の仕上げは、荒く凹凸が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土は精良であるが1~3mm大の砂粒を含む。 焼成は堅緻。 色調青灰色。 坏13とセットを為す。
8	10	坏蓋	<ul style="list-style-type: none"> 天井部は丸味を持つが頂部は、荒いヘラ切りで平坦である。 天井部と口縁部の境は不明瞭である。 口縁部は、外下方に開く。 	<ul style="list-style-type: none"> 天井部は、ヘラ切りが$\frac{2}{5}$で荒く残され、ヘラ削りは行なわれない。 天井内頂部には、仕上げナデを認める。 全体として器壁は厚い。 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土は精良であるが1~3mm大の砂粒を含む。 焼成堅緻。 色調は、青灰色であるが部分的には自然釉が融着する。
9	17	坏身	<ul style="list-style-type: none"> 立ち上りは、1.5cmを計り、内傾してから外彎して直立に近くなる。 受部は、外上方へ、ゆるく伸びて端部は丸味を持つ。 体部から底部にかけては、丸くつくられている。 	<ul style="list-style-type: none"> 底部ヘラ削りは丁寧で、$\frac{4}{5}$弱である。 内底部には、叩目を残す。 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土は精良である。 焼成は不良である。 色調は灰白色である。 坏蓋-16と対応する。 18の上に重ねられていた。

番号	土器No.	土器名	形態上の特徴	手法上の特徴	その他
10	20	坏身	<ul style="list-style-type: none"> 立ち上りは、1.5 cmを計り、内傾してから立ち上がる口縁端部は丸味を持つ。 受部は外横方向に伸び、端部は丸味を持つ。 体部から底部にかけては、丸くつくられているが、底部との境は明瞭である。 	<ul style="list-style-type: none"> 底部ヘラ削りは、$\frac{2}{3}$弱である。 内底部には仕上げなでを認む。 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土は精良である。 焼成は不良である。 色調は灰白色である。 坏蓋24と対応する。
11	26	坏身	<ul style="list-style-type: none"> 立ち上りは薄く、内傾していて、端部は丸味を持つが細く尖った感を呈する。立ち上りは1.2 cmを測る。 受部は、外横方向に伸びている。 体部と底部との境は、ヘラ削りにより明瞭に画される。底部は平坦な丸味を示す。 	<ul style="list-style-type: none"> 底部ヘラ削りは$\frac{2}{3}$強であり、体部の器壁は比較的薄い。 内底部には、仕上げなでを認める。 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土は精良であるが、1~3mm大の砂粒を含む。 焼成は良好堅緻。 色調は、明るい青灰色。
12	14	坏身	<ul style="list-style-type: none"> 立ち上りは、大きく内傾してから直立し、1.2 cmを測る。 受部は外横方向に伸び、その端部は丸味を持ち、やや上向する。 体部と底部との境は、ヘラ削りにより明瞭である。 底部は、平坦な丸味を示す。 	<ul style="list-style-type: none"> 底部ヘラ削りは$\frac{2}{3}$程である。 内底部には、仕上げなでを認む。 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土は精良であるが、1~3mm大の砂粒を含む。 焼成は良好堅緻。 色調は、明るい青灰色。 坏蓋25とセットを為す。
13	12	坏身	<ul style="list-style-type: none"> 立ち上りは、器厚が厚く直線的に内傾する。立ち上り高は、0.7 cmを計る。 受部も器厚が厚く外上方に向く。端部は稜を持つ。 底部と体部との境は、明瞭であるが、地つきになる部分は平坦である。 	<ul style="list-style-type: none"> 底部ヘラ削りは荒く、ヘラ切り痕を残す。 内底部に仕上げなでを認む。 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土は精良であるが、1~3mm大の砂粒を含む。 焼成は良好堅緻。 色調は明るい青灰色で外向には自然釉が融着する。 坏蓋11とセットを為す。

番号	出土番号	土器名	形態上の特徴	手法上の特徴	その他
1	21	短頸壺	<ul style="list-style-type: none"> 口頸部は短い。 直立してから外上向に彎曲している。 端部は、さらに外横方向に張り出し、稜を為している。 着部は、中上位にあり最大径を持つ。 着部から胴中下位にかけては稜を持たず、なめらかに整えられている。 	<ul style="list-style-type: none"> 底部は、丸味を持つがヘラ削りが荒く安定が悪い。 口頸部は横なで調整による。 肩から体部中下位までは、カキ目が荒く行なわれる。 底部はヘラ削りが行なわれる。 内底部には仕上げナラを認む。 	<ul style="list-style-type: none"> 内面には赤色顔料が付着する。 胎土は精良で1~2mmの砂粒を含む。 焼成不良。 色調は、灰白色を呈する。
2	19	広口壺	<ul style="list-style-type: none"> 内頸部は、長く直立してから上部で大きく外反して、口縁を為す。 口縁部は、強く外上方に引き出され、端部で肥厚して、断面菱形を呈する。 胴部は、広くふくらみ底く安定している。肩と胴部の境はなだらかである。 底部は丸底であるが広く安定している。 	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は、内外面とも横なで整成。 胴部は、カキ目の上に横なでを施す。 底部は、ヘラ削りが広く為されている。 内底部は段状を呈す。 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土は精良で1~3mm大の砂粒を含む。 焼成堅緻。 色調は、灰黒色を呈す。 一部に灰をかぶる。 内面は青灰色を呈する。
3	22	短頸壺	<ul style="list-style-type: none"> 口頸部は、直立するが短い。口縁端部は直線的に平坦に、なでられている。 肩部より頸部までは平滑で、胴部とは明瞭な肩部によって分けられる。 底部は、丸味を持つが広く安定している。 	<ul style="list-style-type: none"> 底部を除く内面と口頸部、肩胴部まで横なで調整。 底部はシャープなヘラ削りが行なわれる。 内底部に仕上げナデを認む。 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土は精良で1~3mm大の砂粒を含む。 焼成堅緻。 色調は青灰色。 23とセットになる。
4	23	短頸壺蓋	<ul style="list-style-type: none"> 天井部は丸味を持ち、口縁部との境は目立たない。 口縁部分は平坦になでられてシャープである。 	<ul style="list-style-type: none"> 天井部のヘラ削りは$\frac{4}{5}$で広い。 天井内頂部を除いては、なめらかで横なでが行なわれる。 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土は精良だが粗い石英の粒を若干含む。 焼成堅緻。 色調は、青灰色を呈する。

番号	出番 十 番	土器名	形態上の特徴	手法上の特徴	その他
5	53	短頸壺	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は短く、やや内傾し、その端部は丸味を持つ。 口縁部の立ち切りと肩部は、明らかな稜によって分かれる。 肩部は平滑に仕上げられ下り気味であるが胴部との境は稜をなし、明瞭である。 胴部は、狭く直ちに移行するが、浅い凹線が一条廻っている。 底部は丸底である。 	<ul style="list-style-type: none"> 内面から底部を除く外面全体に丁寧な横なでを認める。 体部、肩部は平坦に丁寧になでられている。 内底部には仕上げナラを認む。 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土は精良で、1～2mmの砂粒を含む。 焼成堅緻。 色調は、明るい灰色であるが二次的に黄ばんでいる。
6	52	長頸壺	<ul style="list-style-type: none"> 口頸部つけねから、ゆるく内彎しつつ外上方に開く口縁端部は丸味を持つ。 頸部から肩部にかけては、平滑になでられ、なめらかである。 頸部と肩部にかけて一条の凹線がめぐる。 肩部一胴部境には、凹線二条で飾られている。 胴部はへら削りの上を横なでして丁寧に仕上げられている。 底部は狭く感じられるが、安定している。 	<ul style="list-style-type: none"> 口頸部内面から胴にかけて丁寧に横なで調整。 胴部～底部は、へら削りが施されているが、胴部はさらにその上部を横なでしている。 口頸部接合部分にはシボリ目を認む。 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土は精良で1～2mmの砂粒を含む。 焼成不良。 色調は灰白色。
	28	壺片 もしくは 甕片	<ul style="list-style-type: none"> 個体数は、不明であるが、一個体と思われる。 丸底の底部である。 	<ul style="list-style-type: none"> 外面、平行叩き紋が不整方向に為されその上をさらに不整方向のカキ目が漸続的に施される。 内面、同心円叩き数が認められる。 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土は、1～3mmの砂粒を含む。 焼成やや不良。 色調は灰白色。
7	29	提瓶	<p>口径部</p> <ul style="list-style-type: none"> 口径部は短く、頸部からゆるく外反し、口縁部でさらに大きく外反して口縁部と為す。 口縁部は外に僅かに張り出すが、段は弱く丸味を持つものになっている。 体部前面、余り大きくは張り出さない。 中央部は径5～6cmの円盤形の粘と粘で閉じかされている。 体部側面には1対の環状の耳が付されている。 体部背面は平坦ではなく、やや張り出して、格子状の叩目痕が粗いへら削りの間に残る。 	<ul style="list-style-type: none"> 口頸部の内外面とも横なで調整 体部前面と側面にはカキ目(1cmに5条の割で)施されているが側面には叩目痕が肩部に残る。 体部背面は、叩目の上に粗いへら削りが行なわれているが側面に叩目を残す。 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土は、精良であるが、微細な砂粒やや多く含む。 焼成堅緻。 色調は青灰色を呈する。
8	27	提瓶	<ul style="list-style-type: none"> 口頸部は高く太い。 頸部からゆるく外反し、口縁部近くで内彎して口縁端部を形づくる。 端部は丸味を持つ。 口頸部つけ根あたりは平坦になでられている。 体部前面は弧状に張り出している。 体部背面はへら削りにより平坦に作られる。 体部側面には、一対の耳が付されているが、鉤形の先端は僅かに曲る痕跡だけである。 	<ul style="list-style-type: none"> 口頸部内外面は横なで 体部前面は1cmに6本の割で緻密なカキ目が全体に施される。 体部背面は、粗いカキ目が施される。 体部側面観は、へら削り→カキ目→再度のへら削りといった成形順を認める。 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土は精良で1～4mm大の砂粒を含む。 焼成堅緻。 色調は、明るい青灰色。
9	51	提瓶 羨道右 奥側壁 大	<ul style="list-style-type: none"> 口頸部は、体部側面の中央に円孔を穿ち取り付けられる。 口頸部は、僅かに直立してから大きく外反し、口縁部に近づき再び直立している。端部は丸味を持つ。 口頸部は、口頸部に傘状のへら記号がある。 体部は正円形で、側面に1対の鉤形の耳を付ける。 体部側面形は、左右ほぼ対称に作られ全面に粗いカキ目を施す。その間隔は3本/1cmである。 体部正面には、円形7cmの粘土板を貼り付けられている。 	<ul style="list-style-type: none"> 口頸部内外面と体部背面、内面の中央部を除く内面は横なで。 体部外面(外面、背面ともに)は、カキ目調整、背面はへら削りを丁寧にカキ目で消して、左右シンメトリカルである。 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土は精良で、細かい砂粒を僅かに含む。 焼成堅緻。 色調は、暗い青灰色。

b 土師器

壺 実測図を取ることはできなかったが口径15cm・高さ17cm前後の丸底の器形と考えられる。口縁部は丸味を持つが水平でなく、ゆるいカーブを持つ。体部は指頭圧痕を多く残した整形である。或いは甕であるとも考えられる。

7章 ま と め

1. 本墳は緩やかに下降する丘陵状尾根支脈の稜線上に築かれた、「L」字形プランの片袖式横穴式石室を内部主体とする小円墳である。

2. 墳丘はすでに旧状を止めない程に失なわれているため詳細は不明であるが、径11m前後・高さ2～3mの横穴式石室をやっと覆う程度のこんもりとした円墳である。石室掘り方は山側に深く裾側に浅く尾根を「L」字形に穿った断面を呈し、その平面形も石室プランと相似する「L」字状であると推測される。ただ、羨道部前半では根石は他の根石部分より高いレベルを示し、この部分の掘り方が、他とは少し異なっていることを付記しておきたい。

3. 埋葬主体部は、N75°Eに主軸を定め、西南西に開口するが、羨道部から向って左側が1.4m程奥まる特異な形状を示す。石室は小形で、全長3.2～3.4m・玄室長2.2m・玄室巾1.4m・羨道長2.4m・羨道巾0.8mの歪んだ「L」字形のプランを呈する。玄室床面には安山岩角礫と扁平な割石が敷石されるが、羨道部は角礫が用いられず、敷石も奥部のみに行なわれている。なお天井部の様子は既に取り去られているため定かでないが、玄室の高さは1.5m前後の比較的低いものであったと推測される。

4. 遺物の出土状況は、玄室中央部から北壁よりに須恵器と土師器・鉄刀・鉄鏃・馬具一式が出土し、中央部に玉類と須恵器が検出されたが、羨道正面の玄室南半部分では僅かに須恵器（提瓶と壺もしくは甕の底部）が細片となって出土しただけである。一方、羨道部の遺物分布は極めて散漫な状態で須恵器（長頸壺・提瓶・短頸壺）と馬具が検出された。石室内部は後世の攪乱も無いとは言えないが、床面直上に20cm前後の埋土が残っていて、特に玄室に出土した遺物はその大半が原位置を保つものであると考えられる。しかし、遺物組み合わせに不合理な点が認められることから、狭い玄室内の遺物は追葬時に再配置されたものと判断される。羨道部分の出土状況は、羨道部追葬を物語るものか、それとも墓前祭祀の折に使用されたものが配置されたものかは定かでないが、羨道部中央部に遺物の分布が少ないこと、羨道部底面に仕切石状の石組みが認められることから、それ等が棺台であって、羨道部埋葬が行なわれたことを示すと考えられる。

5. 青ノ山6号墳の副葬品は装身具類・武具類・馬具類と須恵器・土師器であるが、甲冑・農工具・鏡・埴輪等は検出されない。装身具としては平玉・管玉・ガラス製丸玉・ガラス製小玉が出土しただけで、勾玉・耳環などは検出されなかった。武具類は、鉄刀・鉄鏃、馬具類は轡の組み合わせと辻金具・鉸具・鎖が出土した。土器類は須恵器22個体と土師器1個体で、須恵器のうち高坏・平瓶・器台などは検出されなかった。失なわれた遺物も有るかと思うが、勾玉や耳環を持たないことや、盛装に近い馬具を持つ反面、農工具を持たない点で、かなり特徴的な被葬者の性格がうかがわれる。

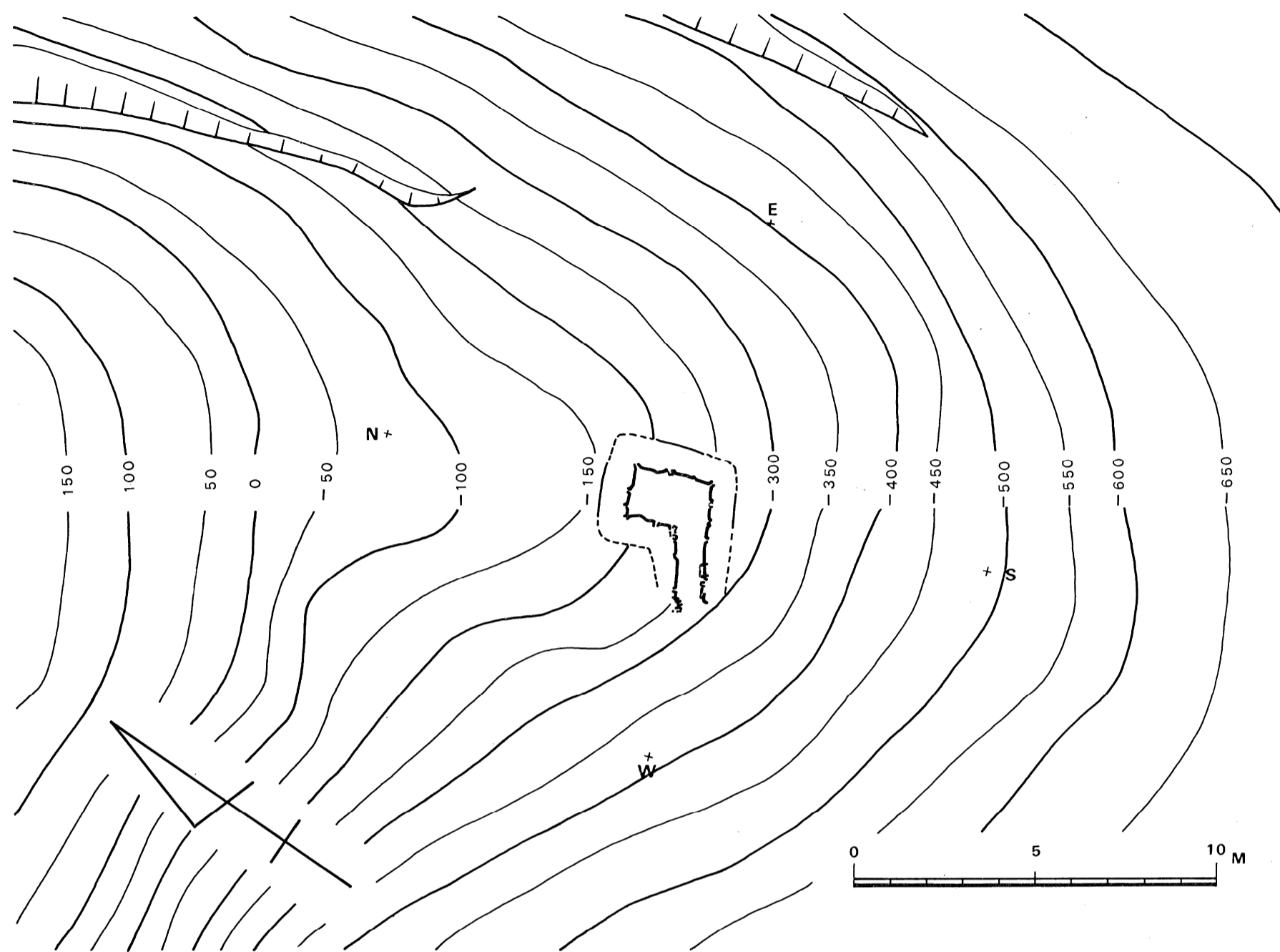
6. 埋葬者の数或いは、追葬回数は定かでないが、須恵器の形態上の分類から2回乃至3回の追葬が行なわれたと考えられる。しかし、須恵器の埋納は必ずしも追葬時だけに限られるものでもないし、葬送儀礼として羨道部などに須恵器等を供献することや葬送の後の儀礼も考えられないことはないことから、現段階では断言できない。

7. 本墳は遺物から見る限り6C後半の始め頃から7C前葉までと考えられる。

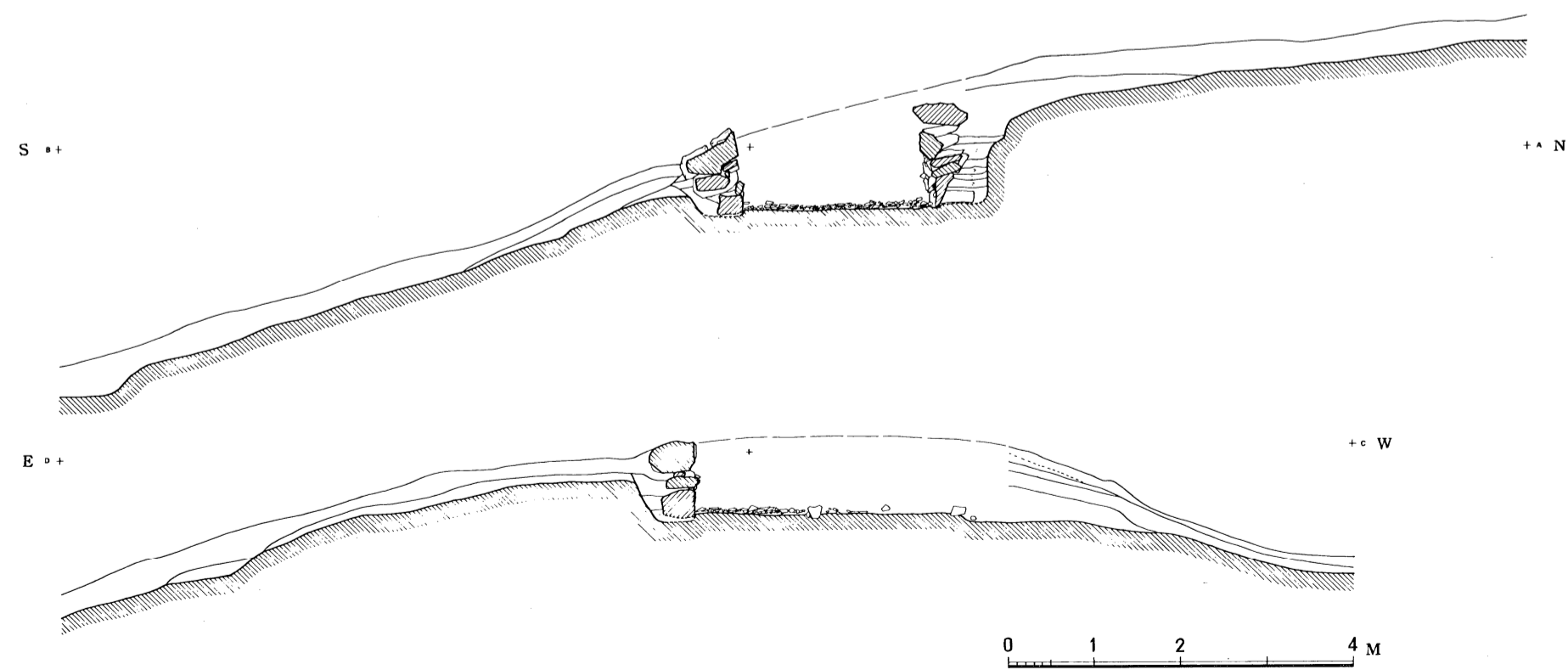
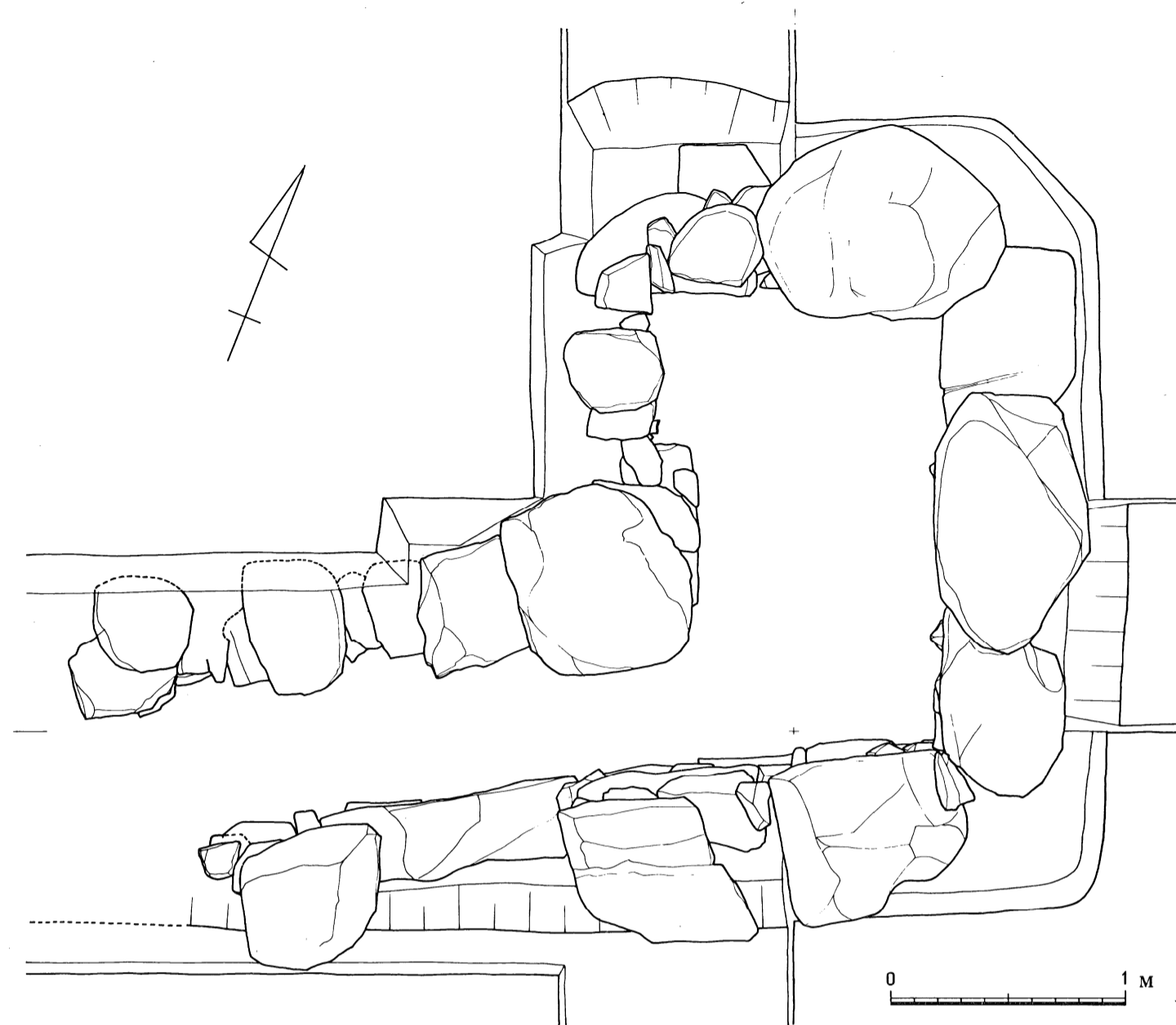
8. 青ノ山山麓に所在する後期古墳は夫々が独立の地形に立地し、一定の間隔を置いて分布するがやはり群集墳の一類型を示す。また、224.5mを測る青ノ山山頂部に立地する青ノ山1号墳や青ノ山2号墳のように比較的急峻な中腹に敢えて築かれ、小口石を持つ竪穴式石室状の内部主体を伴う特異な小円墳や、田潮神社裏のものごとくの海岸線近くの山裾に所在する円墳など、各々の古墳の立地や形態のうえでバラエティを持ち、その分布の仕方とともに注目に値する。また竜塚古墳(青ノ山7号墳)は、墳丘規模の大きいことや奥壁ほかに使用されている石材の巨大さなどから、香川県の要所に所在する巨石墳とともに注目されるべきものである。さらに付記しておかねばならないのは、青ノ山山頂から西に田潮神社古墳に至る道筋に須恵器坏片と鉄器片を表採したことから青ノ山2号墳のごとき小円墳或いは墳丘を持たない墓制が青ノ山山麓に所在する可能性の非常に高いことである。

9. 瀬戸内海を直下に見降ろす青ノ山山麓に所在する青ノ山古墳群は丸亀平野の門戸にあって、その立地や分布の形態や各々の古墳のプランといった諸点から、海と関係する特異な集団の形成したものと考えたい。しかしこの点については今後さらに具体的資料を蓄積し、各地の類例を比較検討する他、多くの作業を経て解明されるべきことからであることは言うまでもない。

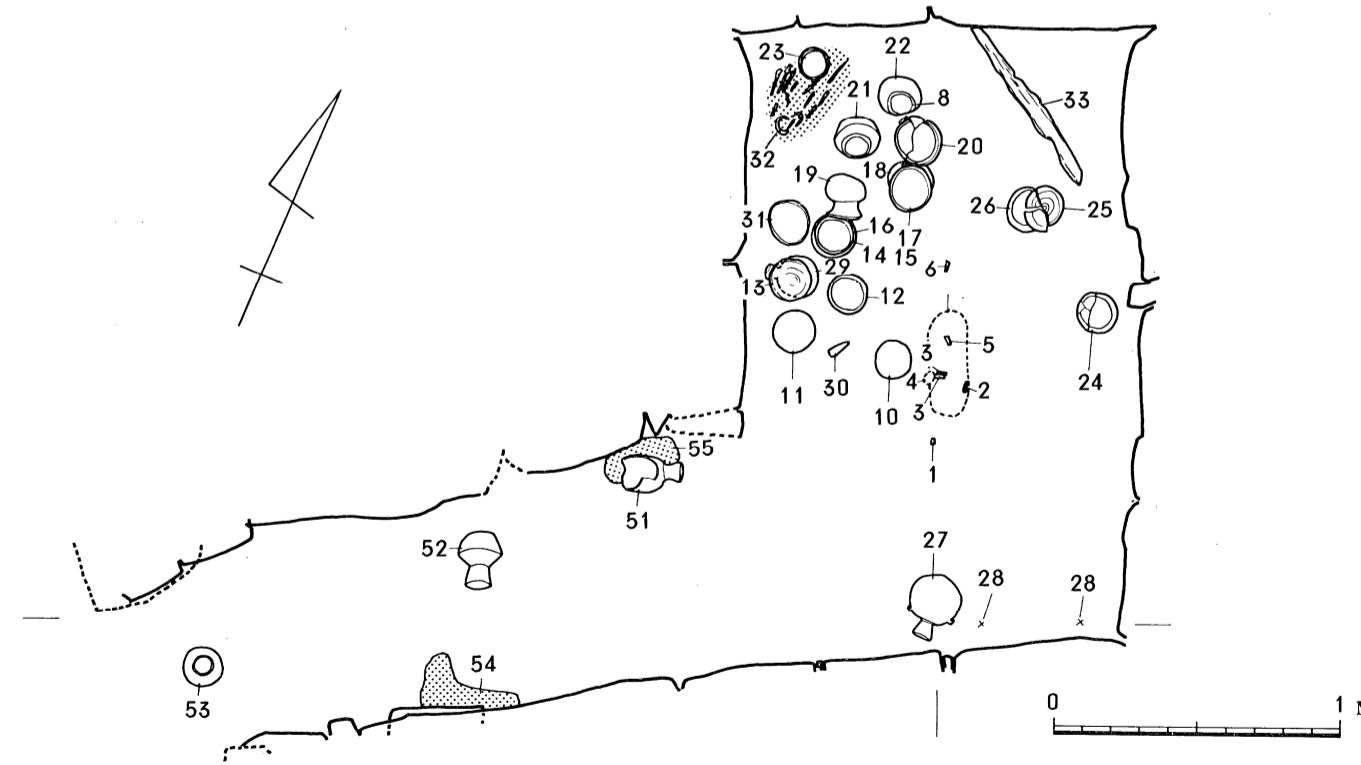




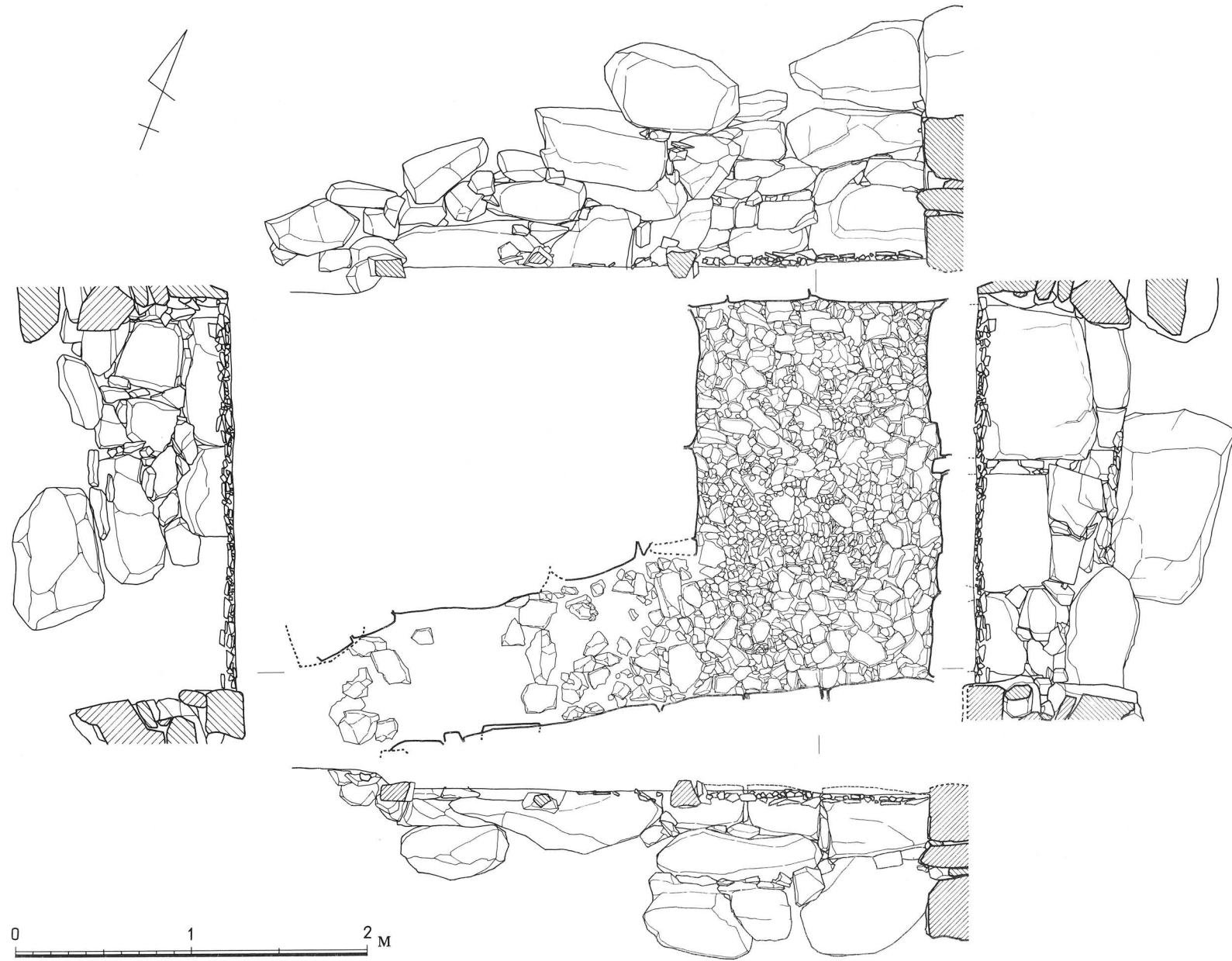
墳丘実測図



墳丘断面図



石室上面フラップ、石室遺物分布図



石室実測図



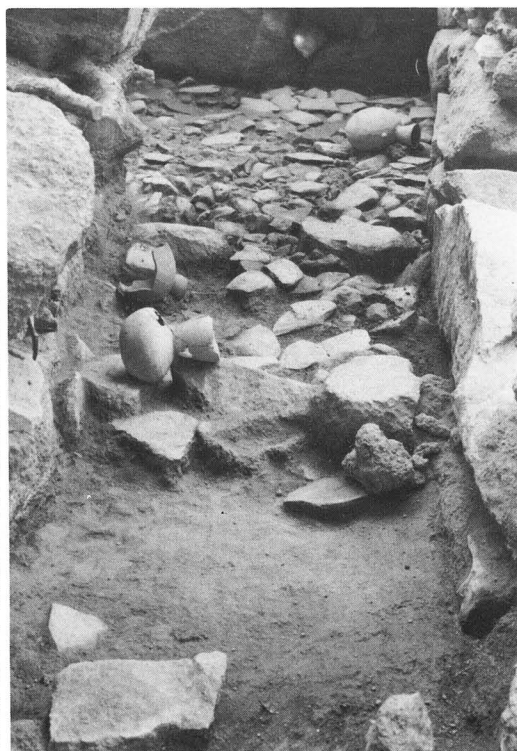
丸亀平野と青ノ山遠景



青ノ山6号墳遠景



青ノ山7号墳(竜塚)の奥壁



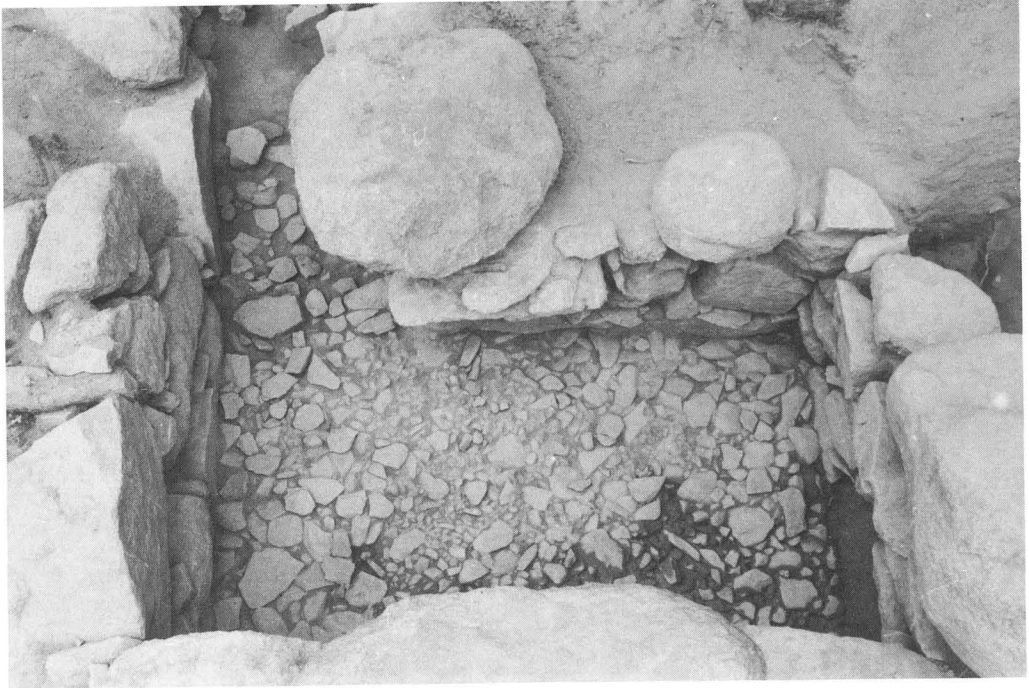
青ノ山6号墳遺分布状況



玄室奥半部の遺物分布状況



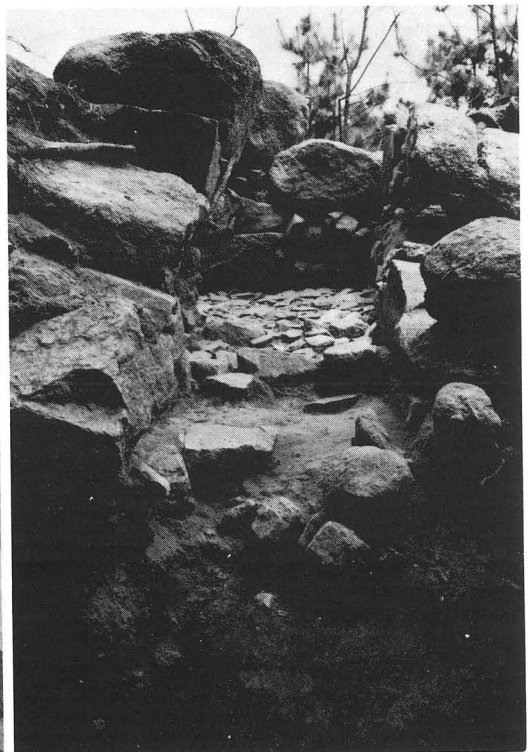
石室全景



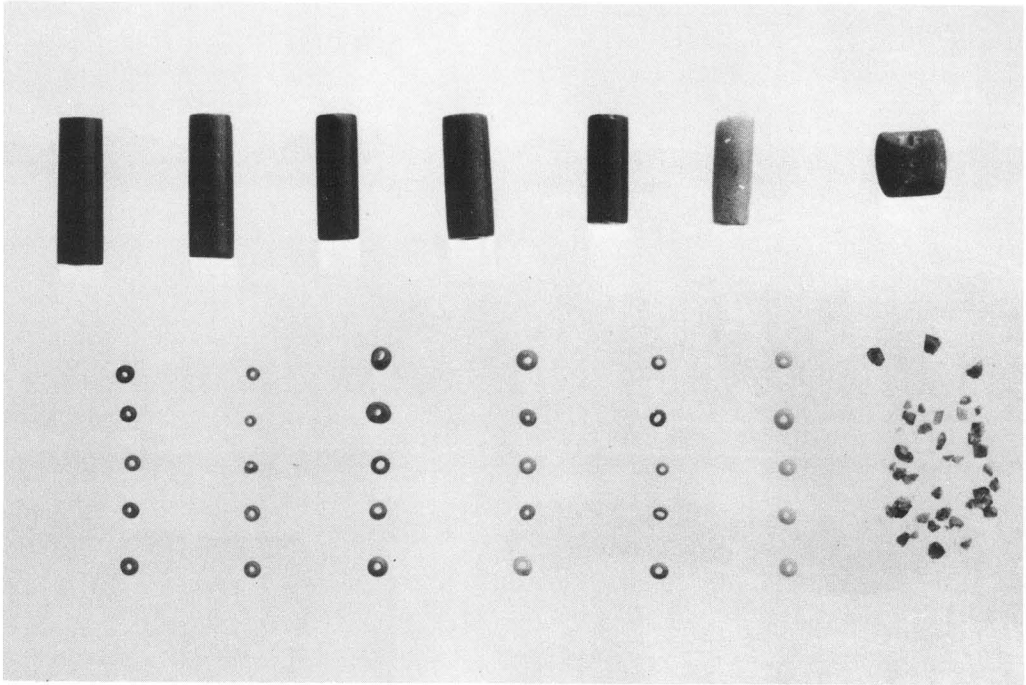
石室全景



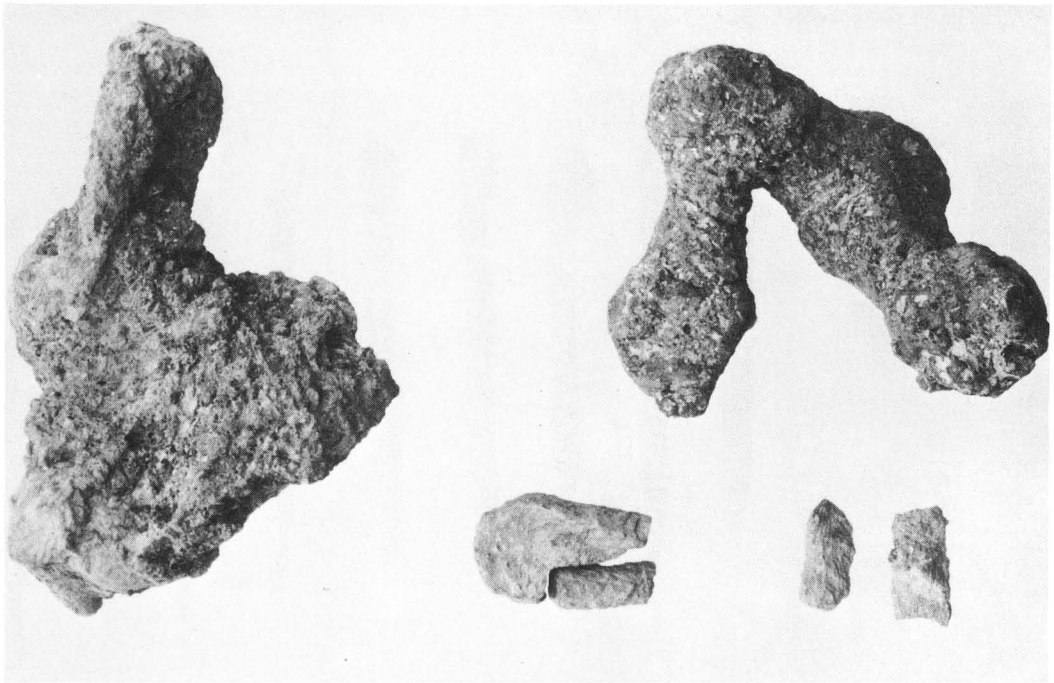
石室全景



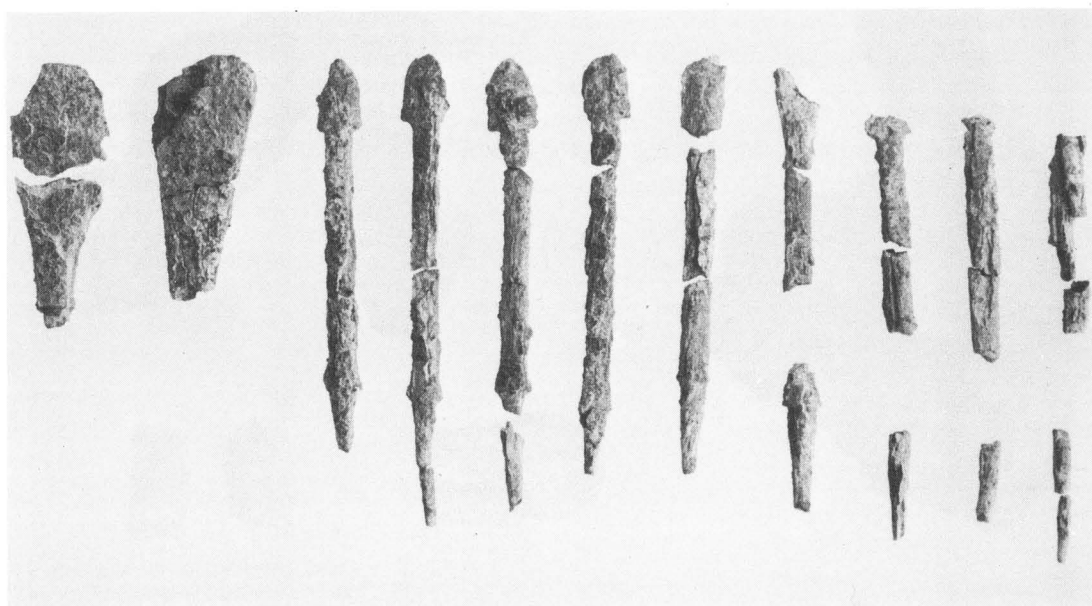
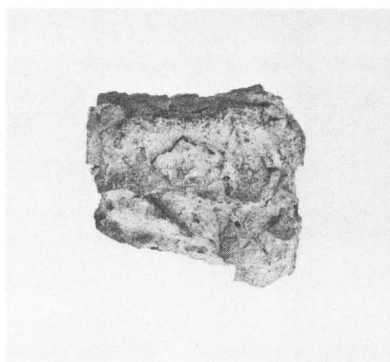
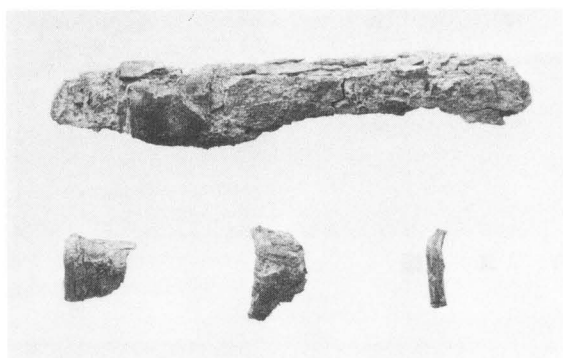
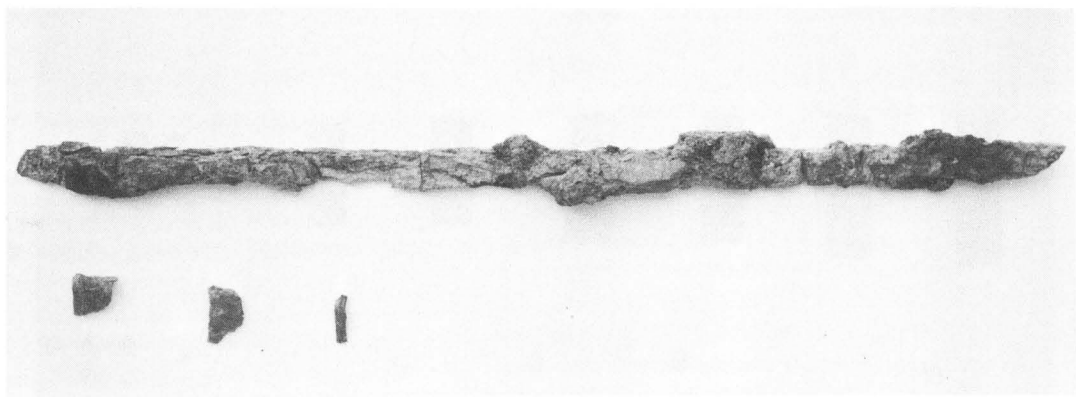
羨道部から玄室を望む



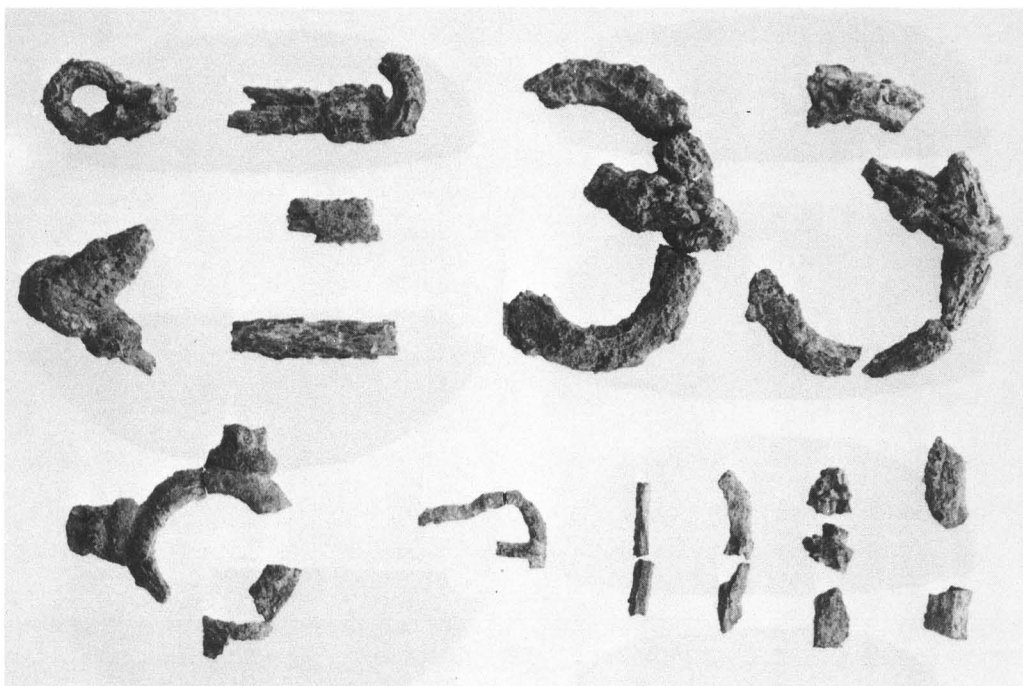
装身具類



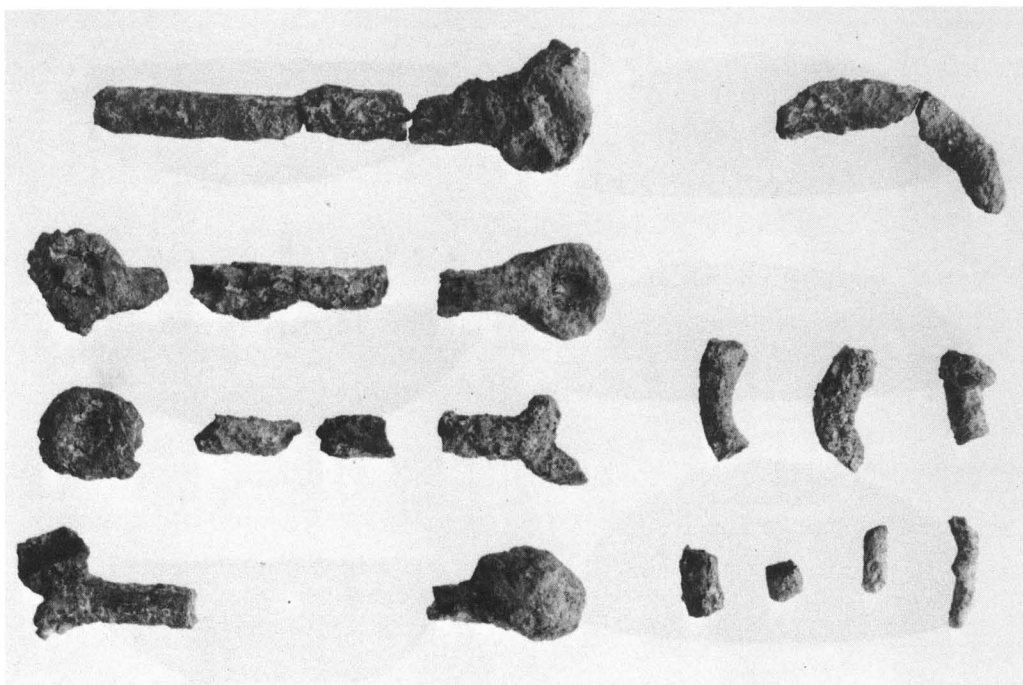
羨道部出土馬具類



武 具 類



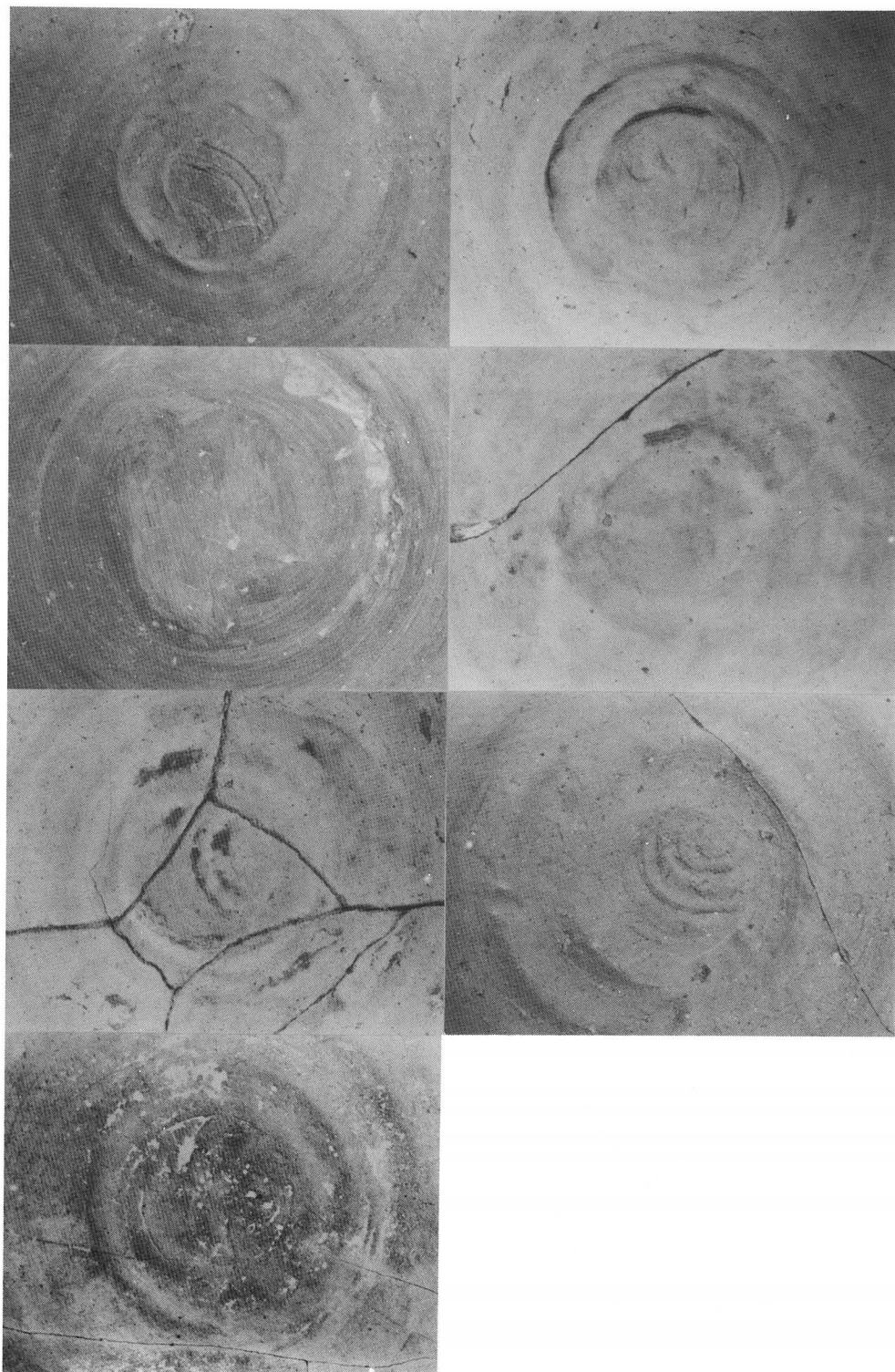
玄室部出土馬具類



羨道部出土馬具類



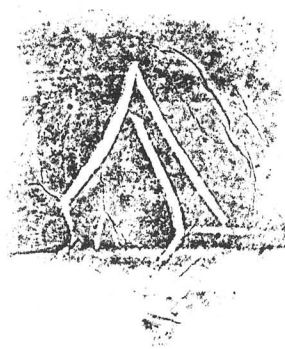
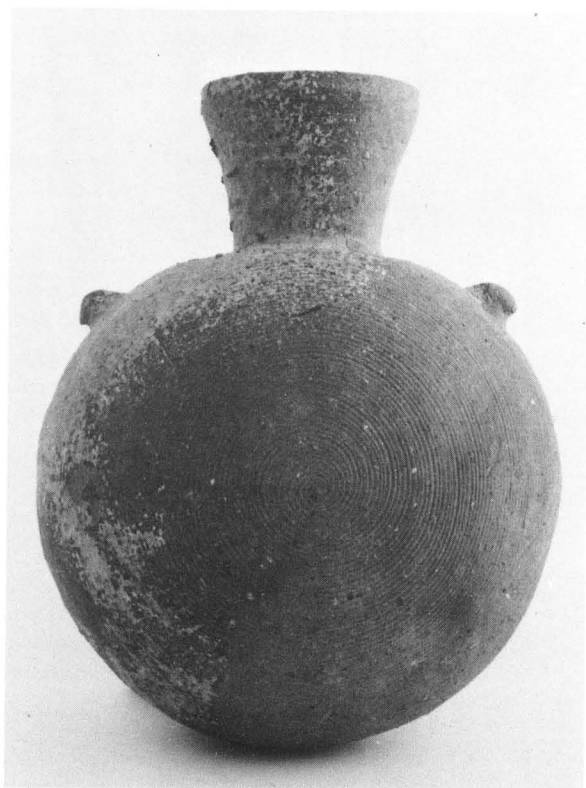
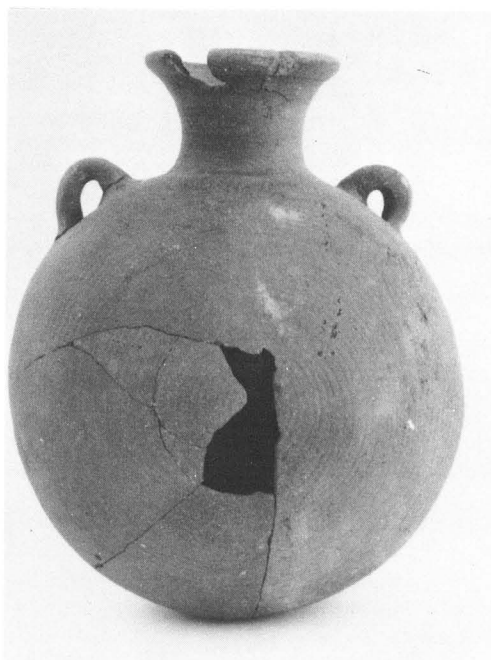
須惠器 (1)



須恵器(2)坏, 坏蓋の内頂部叩目



須恵器(3)



上右図の提瓶頸部にあるヘラ記号

須恵器(4)ヘラ記号